
カシューナッツはお好きでしょうか？

たこき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カシユーナッツはお好きでしょうか？

【Nコード】

N6779X

【作者名】

たこぎ

【あらすじ】

アイドルを題材とした物語です。

アイドルをプロデュースする老け顔の男『ふけさん』。

アイドルを目指す少女『カエデ』。

新人アイドル『ハルカ』。

アイドルに恋する警察官『川島』。

そして、謎の『アイドル研究家』。

この5人がおりなす恋物語……にする予定です。

各話ごとに主人公が変わる形式で書いています。
ぜひ、読んでやってください。

プロローグ

（プロローグ）

私には、変な癖がある。

『こつしたら、どうなるだろう？』

と変なことを思いつき、それを実行したくなる。実行したくなるだけならまだいいのだが、どうやら私にはそのどうでもいい思い付きを実現させてしまう、驚異的な行動力も備わっているらしかった。

普段は全く行動力がなく、ダメな私だが、変な思い付きを実現させることに限ってだけ、何故かものすごい行動力を発揮するのだ。その行動力のせいで、四、五回警察のご厄介になったことがあるほどだ。ご厄介といっても、痴漢をしたり、暴力行為を行ったりはしていない。断じてしていない。ただ、少し迷惑な行為をしただけ、ただそれだけなのに、無能な警察どもは私のことを変人扱いした。許せない！ 国家の犬め！ 税金返せ！ ……これ以上無意味な発狂はやめて、物語を進めることにしましょう。

さあお楽しみ、これから始まる物語はきつと、あなたの脳髓に一滴として残らないでしょう。読んだあと「読まなきゃよかったあ！ ……時間返せ！ ……」と後悔することでしょう。えてして、人生とはそういうものです。よく、「無駄なことにこそ意味があるんだ」という詭弁を耳にしますが、そんなことありません。無駄なものは無駄です。意味などありません。意味など求めている時点で負けです。 ……ん？ 話が長いって？ わかりました、でわ、今度こそ話

を進めましょ。じ。じ。じ。

1・ふけさん(前書き)

各話のタイトルの人物がその話の主人公となります。話ごとに主人公がかわりますので、少し読みにくいかも知れませんが、ご了承ください。

1・ふけさん

今日もまた、ぶらりとオフィス街を歩いていると、ある建物に目がとまった。その建物はいわゆる『貸しスタジオ』として使われている建物であった。私は何の気なしにその建物に入った。

今年で二十八になる、超老け顔の私。昔から老け顔で、中二の時についたあだ名が『ふけさん』な私。見た感じ、五十歳くらいのおっさんにしか見えない私。……そんな私が勝手に建物に入って、呼び止められないわけがない。

「どちら様ですか？」

当然のように私は呼び止められた。

「社長です」

私は堂々と、歯切れよく答えた。今までの経験から言って、こういう場合は堂々としていたほうがかえって怪しまれないものだ。

「じゃ、社長ですか!？」

「うむ。そうだよ。何だね、この人間は社長の顔もわからないのかね?」

私は相手の言葉にかぶせる様に、少し威圧的な態度で言った。

「そ、そんなことはありません。ちゃんと知っていますよ。まさかいらっしやるとは思っていなかったの。来る前に連絡していただ

ければよかったのに。ささ、どうぞ。オーディション会場はこちらになります」

完全に私を社長だと思い込んだ若い男性は少し早口でそう言うと、『オーディション会場』なるところに私を案内してくれた。

はて？ オーディションとは？ いったい何の？

私はそんなことを考えながら若い男性の後に続いてオーディション会場へと足を踏み入れた。

2・ふけさん

オーディション会場には十人ほどのスタッフらしき大人達と、おそらくオーディションを受けに来たであろう若い二十人ほどの少女達がいた。

「次、エントリーナンバー十二番の子」

「栗山カエデ、18歳です。よろしくお願いします！」

「君はどんなアイドルになりたいの？」

「はい！ 私は歌やダンスのレッスンをがんばって、一生懸命努力して、歌って踊れる一流アイドルになりたいです！」

「へえー、そう。じゃあ、今までどんな努力をしてきたの？」

「はい、アイドルになるために、毎日四時間のダンスや歌のレッスンをしてきました」

「どうやら審査の真っ最中らしく、まだ垢抜けていないアイドルの卵が必死になって自己主張をしていた。」

「おせーよおまえー！」

「すみません」

私のことを案内してくれた若い男性が、おそらくこの中で一番偉

いと思われるハゲ頭の男性のもとへと向かい、何やら話し始めた。

「……で、ちゃんと準備できたのか？」

「いえ、すみません。まだです」

「はあ？ お前なめてんの？」

ハゲさんは相当イラついているらしく、言葉の抑揚が暴力的だった。ハゲさんのイラついた雰囲気狭い会場に充満していて、若いアイドルの卵達はとても息苦しそうだった。かわいそうに。

「それが、社長が来たので、それどころじゃなかったんです」

「え！？ 社長？ うそ？ どこにいるの？」

ハゲさんはしきりにキョロキョロしていた。……マズイ、さすがにハゲさんくらい偉い人であれば本当の社長の顔ぐらい知っているだろう。ばれる前に逃げようか……。私がそんなことを考えていると

「あちらです」

と、案内してくれた若い男性に指を刺された。マズイ、非常にマズイ……。

「そうです。私が社長です。オーディションは順調ですか？」

思わず、そんな言葉が口から出てきた。

「……………」

ハゲさんが黙り込んだ。私のことを疑っているのだろうか？　くそ、万事休すか……。私がまた警察の厄介になる覚悟を決めたとき、ハゲさんが勢いよく近づいてきた。

「いやー、社長お久しぶりです！　どうです？　今夜あたりまた呑みに行きましょうよ」

……おい！　ハゲさん、あんたそれでいいのか！？

「そうしたいのはやまやまなんだけどね、もう帰らなくちゃいけないんだ」

私は自分がニセ社長であることがばれる前に退散しようと思いついて話を早く切り上げようとした。四、五回警察のご厄介になった経験で学んだことは『深追いをしない』『腹八分目でやめる』ということだ。そう思った私が、帰ろうと方向転換をしようとしたとき、

「そつだ、社長から一言お願いしますよ」

とハゲさんに言われ、手を引かれ、まだあどけないアイドルの卵達の前に立たされ、スピーチをする羽目になった。

もう一度確認しておきますが、私は今年で二十八歳になる、少し老けた顔をした、ただの公務員です。全くの部外者です。

さて、何を言おうか……。私は黙ったままでは怪しまれると思い、苦心しながらも言葉を搜し、口を開いた。

3・ふけさん

「さっきの十二番の子。君はアイドル失格だね」

少し、キツめのトーンで、私は言葉を発した。十二番の少女は少し動揺した顔をしていたが、目は反抗的だった。

十二番の少女を槍玉に挙げたのは、ただ単に話の内容が思いつかなかったから。ただそれだけ。ごめんね、十二番の子。

「どうしてですか？ 一生懸命努力して、一流のアイドルになりたい。この気持ちのどこがいけないのですか？」

十二番の少女は臆することなく社長（ニセモノだけど）にたてついた。これは、若さがなせる技だなあ……。若いころは私にも変な自信があって、周りの人の言葉なんか、素直に聞く気になれなかったもんなあ。うんうん……。ってかマズイ！ 予想以上に食いついてきた。どうにかこの子を落ち着かせないと……

「いいですか、アイドルというのは人に『憩い』を届ける仕事です。努力をするということは、無理をするということです。無理をしている人が、誰かに『憩い』を届けられますか？ 努力するのに夢中で、心に余裕のない人が、いったい何を伝えられたいのでしょうか？」

テキトウです。私、今ものすごくテキトウなこと言っています。十二番のお嬢さん、これで引き下がってくれませんか？

「……でも、毎日レッスンしないと歌もダンスも覚えられません。

うまくありません。へたくそなままじゃ評価してもらえません！
だから努力は必要だと思います。絶対に」

十二番の少女は「絶対に」と力強く語尾を結んだ。おいおい、最近の子はどんだけすごいんだよ。仮にも社長だよ？ 社長に対してこれだけ強気でモノを言えるなんて……。若さってコワイ。

「大切なのは、君が言う努力を何でもない日常に変えることだよ。一流のスポーツ選手ほど、努力をしていないと言う。それは、努力を隠したいからそう言っているわけじゃなくて、本当にそう思っているからなんだ。

つまり、何を言いたいかというのだね、他の人から見たらスゴイ努力しているように見えても、その人にとっては日常のことであり、努力をしているという自覚がないということなんだ。だから、余裕をもてる。無理をしていないから、一流のパフォーマンスを披露できる。

アイドルもそう。僕らが歯を磨くように、毎日四時間の激しいレッスンを平然とこなす。レッスンの後に『疲れたー』とか『自分は努力した』なんて思わない。だって毎日の食事と同じ、ただの日常の一部でしかないんだから。そういう心持ちで淡々と激しいレッスンをこなす。そして、心に余裕を持って、自身を表現する。それができて初めて、『一流のアイドル』になれるんだよ。

今の君は無理して努力して、心に余裕がないんじゃないかな？ それじゃ、ダメだよ。普通の人じゃ耐えられないような激しいレッスンを、涼しい顔で平然とこなす。それができて初めて、心に余裕が生まれ、人に『憩い』を届けることができるんだよ」

テキストウです。ああ、テキストウです。自分でもなに言っているかわかりましえーん。

「……………すいませんでした」

どうやら十二番の少女はあきらめてくれたようだった。ありがとう、君はきつと将来すばらしいアイドルになるよ。そのときは、影ながら応援するからね。それじゃ！

「でわ、みなさんさようなら。オーディションを続けてください」

私は自分がニセ社長であることがばれる前にそそくさと退散した。

4・ハルカ

『大切なのは、君が言う努力を何でもない日常に変えることだよ』

突如オーディション会場に現れた社長さんのこの言葉を聞いて、私は本気でアイドルを目指そうと思った。

最初は友達が「一緒にオーディションを受けてほしい」と泣いて頼んできたので、仕方ない気持ちでオーディションを受けに行った。テキストウに答えて、さっさと落選して帰ろうと思っていた。でも、突如現れた社長さんの言葉で、アイドルという職業に興味を持った。『憩いを届ける仕事』という言葉にグツときた。アイドルになりたいと思った。

「ハルカさん、スタンバイお願いします」

「あ、はい！」

あのととき、自分のオーディション番号が十五番で良かった。十二番よりもはやい番号だったら、きっと私はアイドル『カシユーナッツ』のメンバーに選ばれなかったと思う。

そんなことを考えながら、私は眩いステージにつながる階段を、駆け上がった。

5・アイドル研究家

アイドル『カシューナッツ』

つい最近デビューしたばかりの新米アイドルだ。デビュー曲は『カシューナッツ』は好きですか？』。オリコン初登場5位はなかなかの結果といえるだろう。所属はアイドルプロダクション『わっしよい』。

メンバーは、ハルカ、クミ、マリコの3人。いわゆる、“王道アイドル”といえる様な風貌や雰囲気を持った3人組みである。

しかし、歌やダンスのレベルは高く、そのパフォーマンスはショーと呼べるレベルにある。特にハルカは身長こそ低いが、ダンスのキレと歌唱力が秀でている。それに顔も愛嬌のある、誰にも親しまれるような顔をしている。

今後、大ブレイク間違いなしの注目アイドルであると太鼓判を押せる、数少ないアイドルであろう。

6 ・警察官川島（前書き）

各話のタイトルの人物がその話の主人公となります。話ごとに主人公がかわりますので、少し読みにくいかも知れませんが、ご了承ください。

6 ・警察官川島

「またお前か！ 人の迷惑を考えろ！」

これで7回目だ……。いったいこの男は何をしたんだ！？ さっぱりわからん。

俺はこの町で有名な変人である”田中敬一”という男を再び捕らえた。この男、まだ28歳にもかかわらず、とても老けた顔をしている。そのため、交番内では「変なおじさん」と呼ばれている。

「離せ！ 国家の犬め！ コンチクシヨウ！！」

この男は今回、道行く人にいきなりジャンケンを仕掛けるといふ奇行をしていた。何が楽しくてそんなことするのかわからんが、苦情の電話が殺到したので、この町の交番で一番下っ端の俺が注意してきたのだ。正確には行かされたのだ。いつもそう、酔っ払いと不良の喧嘩とかさういった面倒くさいことは全て俺が処理する羽目になる……。ああ、はやく後輩こないかなあ。コキつかってやるのに。

「ほら！ いいかげんおとなしくしろ！ とりあえず交番に行くぞ」

俺は抵抗する変なおじさんを羽交い絞めにし、無理やり交番に連れて行くとした。そのとき、

「社長さん！」

俺は思わず腕の力を緩め、変なおじさんを放してしまった。俺の目の前にはあの、アイドル『カシユーナッツ』のハルカちゃんがいたのだ！！ か、か、か、かわいい！！！！！！ かわいいすぎる……。

俺は思わずハルカちゃんに見惚れてしまった。

「社長さん、私、私ずっと、あなたにもう一度あいたかったんです……こんな街中で偶然あえるなんて、うれしいです」

はにかむ様に微笑むハルカちゃん。もう、かわいすぎです。俺の心臓はバクバクだった。

「待ってください！ 社長さん！！」

ハルカちゃんは艶のある髪をなびかせながら、俺の横を走り抜けていった。そのとき、ほのかに漂うシャンプーの香りが鼻腔を通り抜け、俺はまるで夢の中にいるような浮遊感を味わった。ああ、なんていい香りなんだ……。俺は浮遊感を楽しみながら、走り去って行く彼女の後姿を見送った。

パタパタと揺らめくスカートから伸びる、白くて細い足。ギョツと抱きしめたら折れてしまうのではないかと思えるほど、華奢な背。そして、そんな彼女の目線の先には……変なおじさん？ はて？ ということだ？ そういえば「社長さん」ってハルカちゃんが言っていたような……。

俺は次々と浮かんでくる疑問をもてあましながら、美しい少女の背中を見送った。

7・ふけさん

「はぁー、はぁー……」

私は人気のない浜辺へと逃げ込み、警察が追って来ていないのを確認してから一息ついた。

「ふぁー、災難だった。くそ、あの警察毎回私のことを捕まえにきやがる！ 私はただ、町行く人にじゃんけんを仕掛けただけなのに、なんで警察に注意されなければいけないんだ！ コンチクショウ！……はぁ、疲れた」

私は浜辺に寝そべり、上空を見上げて休んだ。

ふぁぁぁ……少し寝るか。私がそう、思ったとき

「ララララ」

テトラポッドの向こう側から、謎の歌声が聞こえてきた。それは、心地よい波の音を掻き消すような、大きな歌声だった。

いったい誰だ！？ うるさくて眠れないじゃないか！ そう思った私は文句の一つでも言っつてやるうと思ひ、テトラポッドの向こう側を覗き込んだ。

「ルルルル」

そこには、一人の少女がいた。相手が強そうな男だったらどうしようかと思っただが、か弱そうな少女なら話は別だ。強気で文句を言

ってやるつ。そう思ったとき、ある考えが浮かんだ。

『この少女の歌声にあわせて、ばれないように八モることができたら、おもしろそうだ』

そう思ってしまった。そして、一度そう思ってしまったら実行せ
ずにはいられないのが私の性分だ。私は「ゴホン」と軽く喉を鳴ら
して、少女の歌声に合わせるように、自慢の美声を発した。

「ララララ〜」

「ララララ〜」

「ルルルル〜」

「ルルルル〜」

ふふふ、さすが私だ。あの少女、全然気付いていないぞ。

「□□□□□〜」

「□□□□□……□？」

異変に気付いたときにはもう、遅かった。私の目の前には、硬く
握られたコブシが迫っていた。

「ハグう!!!」

私の目の前は、真っ暗になった。

8・カエデ

「サイテーー！！ おっさん、あんた何者！？ マジ気持ち悪いんですけど」

私は一人で発声練習をしているときに、急にハモってきた気色悪いおっさんをぶん殴った。おっさんは「ハグウ！！！」と気味の悪い奇声をあげて、その場に倒れた。

「おっさんとは酷いな。私はまだ28歳の青年だ」

おっさんは頭を抱えながら、ゆっくりと起き上がった。……このおっさん、どこかで見たとあるような……。私はおっさんの顔をマジマジと見つめた。私は記憶の中からおっさんの顔を捜した。あと少しで思い出せそうんだけど……。

私はこのおっさんが誰なのかを思い出そうと、おっさんに近づき、さらにマジマジと顔を見つめた。

「ああ！！ 思い出したああ……」

私がそう、叫んだとき。おっさんと私の唇が触れ合った。

9・ハルカ

「はぁー……、やっと、追いついた……」

私は社長さんの後を必死に追いかけて、ようやく浜辺にいる社長さんに追いついた。私はこの胸の中にある感情を社長さんに伝えたくて、呼吸を整えながら言葉を考えた。

社長さんのおかげでアイドルという仕事を好きになれたことを、感謝したい。社長さんとの出会いが私にとってかけがえのないものだったと、知ってほしい。そして、うまく表現できないこの胸のドキドキを伝えたい！

「よし！」

私は呼吸と気持ちを整えて、社長さんのいるテトラポッドの向こう側を覗き込んだ。

「……………ザザア……………」

美しい波の音。唇を重ねあう男女。やけに速く鼓動する心臓。何故か零れ落ちる涙……

気がつくとも私は、海と反対方向に走り出していた。

10・ふけさん

私に重いコブシをあびせた少女は、何故かマジマジと私の顔を見
てきた。そして、私に顔を近づけてきた。……これはまさか!？
「キスして欲しい」のサインではなかるうか!?! ここは男として
はずすわけにはいかない!

そう思った私は少女の唇に自らの唇を押し当てた。

……もう少し美しい表現のできる接吻をしたかったが、こういっ
た経験の少ない私では、衝突事故のようなキスが限界だった。

「おらぁ!?!?! てめえ、このやるう!」

衝突事故のようなキスのあとにやってきたのは、少女の甘い言葉
ではなく、まさに衝突事故のようなコブシだった。

「はぐうう!?!」

私は後方に吹き飛ばされ、テトラポッドに頭蓋骨を打ちつけた。

「あんた……私から夢だけじゃなくて、ファーストキスまで奪いや
がって! 社長かなんだか知らないけど、少し偉いからって、人の
大事なものを奪っていいわけ!? ほんとサイテー!?!」

コブシの嵐が私を襲う。蹴りの嵐も。そして、そんなコブシと蹴
りの嵐の中、冷たい雨が降ってきた。

「これは暴風雨になりそうだ」

私は、まるで滝のようにぼったんぼったんとたれ落ちる少女の涙を見ながら、そんなことを考えていた。

11・カエデ

「オラオラオラオラ！！」

おっさんを殴っていると、少し気が晴れた。ここ最近、オーディションというオーディションに落ちまくり、少し気持ちが落ち込んでいた。

2ヶ月ほど前に受けたアイドル『カシューナッツ』のオーディションでは、このおっさん社長に邪魔されて落選した。この落選を機に、私は調子を崩し、その後に受けたアイドルオーディションでは1次、2次審査での落選が続いた。

最初のころは落選しても「こんなに魅力的な私を落とすなんて！なんて見る目のないやつらだ！」と強気でいられた。でも、さすがに50回近くオーディションで落とされると、自分はアイドルとしての素質がないのではないかと、かなり気持ちが落ち込んでいた。

「くそ！ 社長がなんだ！ このやろう！」

私はここ最近オーディションで落とされたのは、この社長が元凶のような気がしてきて、さらに激しくおっさん社長をぶん殴った。

「ま、まっしてくれ！ わ、私は社長じゃないんだ！」

私は思わずコブシを止めた。社長じゃない？ どういうこと？ 私の思考は停止した。

12・ふけさん

「ま、まっつてくれ！ わ、私は社長じゃないんだ！」

生命の危険を感じた私は、自分が社長ではないことを正直に話し、謝罪することを決意した。私の誠実な思いが届いたらしく、少女は嵐のようなコブシを抑えてくれた。

「社長じゃないって……じゃあ、あんた誰？」

「申し送れました。私、たなかけいいち田中敬一と申します。皆さんからはよく『ふけさん』と呼ばれます。ご覧のとおり、私とても老けた顔をしておりまして、それでふけさんと呼ばれています。あ、これでもまだ28歳なんですよ。驚きました？」

「うそ！？ 28歳？ ふけさん？ いや、だから……えっと、あなた、あの芸能プロダクションとは関係のない人なの？」

「はい、そうです。私この町の市役所で働いている、公務員でございます」

「……じゃあ、何で社長だって嘘をついて、あのオーディション会場に潜入したの？」

「おもしろそうだったからです」

「……じゃあ、なんであのオーディションのとき、私を槍玉に挙げて、責めるような発言をしたの？」

「それは……」

私は思わず返答に困った。返答しただいでは、殺される。そう思えるほど、彼女の目は鋭く私の瞳を睨んでいた。私は少女の怒りが少しでも収まるような回答を必死で考えた。

13・カエテ

「き、君以外の人が、目に入らなかったからです」

ふけさんはオドオドとした表情で、あからさまな嘘をついた。

「ぷ、ぷははは！」

私は思わず笑ってしまった。ああ、この人はなんて嘘をつくのがへたくそなんだろう。そう思うと、何だか怒る気も失せ、何もかもがどうでもよく思えてきた。

「ふけさん、あんた金持っている？」

「あ、はい。それなりに。一応社会人なので……」

「よし！ それじゃ、行くよー！」

「え？ ええ？」

私はキョトンとしているふけさんの手を取り、繁華街へと向かった。

14・ハルカ

社長さんのキスシーンを見た私は、無我夢中で街中を走った。

「もげえ！」

そして、こけた。

「イテテテ……」

膝を大きくすりむいた。真紅の血が滲んでいる。痛い……

「うううう……」

痛みを感じた瞬間、瞳から滝のように涙が溢れてきた。

私、なにやってんだろう……

「大丈夫ですか？」

ふと、声のする方を見上げると、目の前には警察官がいた。私は泣き顔を見られたくなかったので、必死に痛みと涙を堪え、笑顔で答えた。

「大丈夫です。おかまいなく」

私は直ぐに身を翻し、警察官から離れようとした。

「ちよ、ちよっとまって！ き、君はあの社長と会いたいんだろ？」

私の足が止まった。

「俺、あ、あの社長と知り合いなんだよ……だから……そ、そうだ！ これ、これ俺の連絡先。もし、社長に会いたいんだったら連絡して！」

そう言つと、警察官は拳動不審な動きで私に紙切れを渡して去つて行った。社長さんに……もう一度、会える？ 私の胸は少し、ときめいた。

15・ふけさん(前書き)

各話のタイトルの人物がその話の主人公となります。話ごとに主人公がかわりますので、少し読みにくいかも知れませんが、ご了承ください。

15・ふけさん

「あのカエデさん？　もしかして、それ全部買ったんですか？」

カエデと名乗る少女は、買い物カゴに服や雑貨をどんどん入れて行く。

「当然よ」

「お金は……」

「は？　あなたが払うに決まっているでしょ」

「でも……」

「何？　あなた私のような可憐な少女の夢とファーストキスを奪っておいて、何様のつもり？」

「……申し訳ありません」

「ほんとうなら、警察に行ってもいいんだよ？　『変態に襲われました！』って泣きながら交番に駆け込んであげようか？」

「……勘弁してください」

「これでチャラにしてあげようっていう私の寛大な心に感謝しなさい。あ！　これもかわいい。買ったちゃおうとー！」

「……………グスン（涙）」

私は涙をこらえながら、少女のショッピングに付き合った。

16・カエデ

ショッピング、ランチ、ボーリング、スイーツ、ゲームセンター。私は日ごろの鬱憤を晴らすように、ふけさんを連れて遊び歩いた。当然、お金は全てふけさんに払わせた。

「次はカラオケよ！」

「すみません……お金が……」

「そう？　じゃあ、しょうがないわね」

「あきらめてくれるんですか？」

「銀行に行ってから、カラオケに行きましょう」

「……はい」

ふけさんは酷く落ち込んだ表情で銀行へ向かった。

「さてと、まずは何かから歌おうかな？」

ふけさんの財布が少しふくらみをとりもどしてから、私達はカラオケ屋に入った。やっぱり、日ごろの鬱憤を晴らすには、歌うのが一番だ。

「恋して〜 恋してラブミー」

私は最初から十八番【ハチの曲である、アイドル【オイドル『立ち漕ぎシスターズ』の名曲、『恋してラブミー』を熱唱した。

17・アイドル研究家

『立ち漕ぎシスターズ』

アイドル界では名の知れたアイドルグループの一つだ。アイドルプロダクション『わっしょい』に所属していた。

メンバーは3人。元気っ子のアミコ。元気っ子のサナエ。そして元気っ子のヒビカ。そう、普通アイドルグループはキャラがかぶらないようにメンバー構成をするのが普通である。元気っ子、おとなしい子、不思議ちゃん、このようにキャラがかぶらないようにするのが一般的なのだ。しかし、立ち漕ぎシスターズはその概念をぶち破り、まさかのキャラかぶりをやってのけ、マンネリ化していたアイドル界に風穴を開けた。

さらに、立ち漕ぎシスターズのすごいところはそのコンセプトにある。立ち漕ぎシスターズのコンセプト、それは

『超ミニスカートをはいてもパンツが見えない、脅威のフトモモ！
！……！』

……今でもこのコンセプトを聞いたときの衝撃を忘れることができない。まさに青天の霹靂とはこのことだろう。長年アイドルオタクであり、アイドル研究家とまで呼ばれるようになった私ですら、その驚愕のコンセプトに度肝を抜かれた。

『立ち漕ぎシスターズ』は仕事がない時間帯は常に自転車を立ち

漕ぎし、フトモモを鍛え上げていた。そして、競輪選手顔負けの分厚いフトモモは、見事に右足と左足の間の隙間を埋め、男子諸君の永遠の憧れであるパンチらを封印してしまった……。

歌はよかった……顔も悪くなかったのに……。

『立ち漕ぎシスターズ』が結成からわずか2年で解散してしまった理由は、おそらく鍛えすぎたフトモモであろう。このアイドル研究家の私が言うのだから間違いない……

「恋して〜　恋してラブミー」

数年前、少し話題になったアイドル『立ち漕ぎシスターズ』の代表曲『恋してラブミー』を歌う少女。その姿は、シヨッピングをしているときよりも、ランチで5人前の餃子を食べているときよりも、ボーリングでストライクを出したときよりも、カフェで巨大チヨモランマパッフェを食べているときよりも、ゲーセンで昇竜拳を連発しているときよりも、輝いていた。

「恋の隙間は開けたらダメよ〜　フトモモ閉めて逃がさない〜」

まるで別人と思えるほど、少女はキラキラしていた。そのキラキラは、けして眩しいキラキラじゃなくて、触れたら壊れてしまいそうな儂いキラキラだった。「完全」にはない、「不完全」だからこそその魅力。彼女の歌う姿には、それがあつた。

「すごい！　すごいよー!!」

私は彼女が歌い終わると同時に立ち上がり、無意識のうちに拍手をしていた。私はこのとき初めて、「アイドル」というものを理解した。

アイドルは人に勇気を与える仕事でもなければ、ましてや憩いを届ける仕事でもない。がんばっている自分を見せ付けることで、あがいている自分を見せることで、「この子のために何かしてあげたい!」この子のために何か自分にできることはないだろうか?」そ

う、ファンに思わせる仕事なんだ。

自分以外の誰かのために生きることのスバラシさを伝える仕事、
それが『アイドル』なんだ……

「すごい！　すごいよー！！」

予想外のふけさんの反応に、私は驚いた。

「ふん！　これくらい序の口よ。私の魅力はまだまだこんなもんじやないんだから！」

私は少し照れながらも、強気な口調で応えた。

「他に歌える曲もあるんだろ？　ぜひ、聞かせておくれよ！」

「そ、そう？　そこまで言われちゃ、しょうがないわね」

普段一人で歌の練習をしている私にとって、家族以外の人にこれほどの高評価をもらったのは初めてで、正直、嬉しかった。

ああ、やっぱりアイドルという仕事をあきらめたくない。

私はこのとき強く思った。たった一人でも、こんなに目を輝かせて私の歌う姿を応援してくれる人がいてくれたら、それだけで本望だ。それだけで、アイドルを目指す価値がある。

「イチゴの馬車で、潮干狩り」

私はいつもよりも3倍くらい高いテンションで、アイドル『水玉ポニーイチゴ姫』のサードシングルである『イチゴの馬車で潮干狩

り』を熱唱した。

20・アイドル研究家

『水玉ポニーイチゴ姫』

アイドル界では名の知れたアイドルだ。当時、アイドルプロダクション『わっしょい』所属。

メンバーは、『みゆみゆ』と呼ばれる小柄なアイドルと『ぼにゅー』と呼ばれる馬の着ぐるみを着た人。

キャッチフレーズは

『イチゴの国からこんにゅちわ。うっかり人間界にきちゃいましたや、テへ！』

……そう、ガツチガチの不思議ちゃんアイドル。それが『水玉ポニーイチゴ姫』なのだ！ みゆみゆは身長148センチと小柄で、顔も童顔。胸はAカップ。まさに、ロリの神様！ はっ！ は、鼻血が！ ……取り乱して申し訳ない、話を続けよう。

例え容姿が整っていて、不思議ちゃんという特徴があっても、今のアイドル界で活躍するのは難しい。それほど、今のアイドル界は厳しいのだ。それは『水玉ポニーイチゴ姫』も同じだった。ファーストシングル、セカンドシングルと泣かず飛ばず。全く売れなかった。曲もよくなかったし、みゆみゆの歌唱力にも些か問題はあった。さらに、途中で入る「ヒヒーん！」というポニーの泣き声が、非常に邪魔だった。

そして、テレビ放送にも問題があった。視聴者はかわいらしいみゆみゆを見たいのに、ポニーがみゆみゆの周りで奇妙なダンスを踊っているため、「みゆみゆに集中することができない!」、と苦情が殺到した。

そんな『水玉ポニーイチゴ姫』だが、サードシングル『イチゴの馬車で潮干狩り』で一気にブレイクすることとなる。

歌はファーストシングル、セカンドシングルと全く同じ路線で、不思議ちゃんを前面に出した曲だったし、みゆみゆの歌唱力が上がったわけでもなかった。

では、なぜ売れたのか? そう、ポニーが急にブレイクダンスを始めたのだ! それが話題になり、一気に『水玉ポニーイチゴ姫』はブレイクしたのだった! ……長年アイドル研究家をやっているが、アイドルというのはほんとにわからん。なんで、馬の着ぐるみがブレイクダンスをしただけで売れるんだ!? わからん……。つてか、絶対馬の着ぐるみの中身変わっているだろ! ……はあ、まだまだ、研究が必要だな。

ちなみに余談だが、みゆみゆはその後、年齢を誤魔化していたことが発覚(当時18歳といわれていたが、デビューしたときにはすでに26歳だった)。さらに、タバコを吸っているところや、路上で男とキスしているところを週刊誌に撮られ、酷いバッシングを浴びた。最終的には馬の着ぐるみを着ていた男(ブレイクダンスをしていた方)とできちゃった結婚をし、アイドル業界から去って行った……。アイドルの後なんて……。その後なんて……

アイドル研究者とは、時にアイドルの裏側を見なければいけない、つらい仕事だなあ。私は改めてそう思った。アイドルの表面だけを見て、ただ喜んでいたアイドルオタクにはもう、戻れないのだなあ。私は少しセンチメンタルになりながら、頼まれたコラムの記事を書き上げた。

21・ふけさん

少女はカラオケ店に入ってから延長に延長を繰り返して、ついには営業時間ギリギリまで一度もマイクを離すことはなかった。

普通の人だったら途中で嫌になるのかもしれないけれど、私は終始興奮し、楽しんでいた。少女の歌う姿はいつでも輝いていて、数十時間見続けても足りないくらいだった。

「……カエデさん、君はなんでアイドルになろうと思ったの？」

少女の歌を聞きながら、私はあることを考えていた。

「君はどんなアイドルになりたいの？」

そう、それは短絡的で至極当然な思考の流れ。

「実は提案があるんだけど……」

こんなに輝いている少女を、こんなところで埋もれさせておくわけにはいかない。それは、人類にとって多大な損失だ。

「私が、君を、アイドルにする！」

私は少女のために、この身を捧げることを決意した。

22・警察官川島

「あ、ハルカさん。この前の『カシユーナッツ』のライブ行きましたよ！ やっぱりハルカさんが一番輝いていました」

「ありがとうございます」

ハルカちゃんにはこやかな顔で俺の話聞いていた。

「いやー、でもまさかほんとにハルカさんが僕に連絡くれるなんて……びっくりだなあ。まさかアイドルとこうやって食事ができるなんて、夢みたいですよ」

ハルカちゃんは無言で微笑み、たらこパスタを器用にフォークで巻き取り、品の感じられる所作で口へと運んだ。

「ところで、川島さんは社長さんとお知り合いだということでしたが……」

ハルカちゃんが「川島さん」と俺の苗字を口にした。それはつまり、彼女が俺という存在を認識したということだ。そう思うと無性に嬉しくて、俺は舞い上がり、思わず嘘をついた。

「そ、そうなんですよ！ やつとは大学時代からの友人でね。いやー、ほんとあいつにはいろいろとやってやったものですよ……」

ハルカちゃんの目がキョトンとしているのに気がつき、俺は思わず言葉の語尾を濁した。

「え？ 川島さんはおいくつなのですか？ とても社長さんと同じ年代の人とは思えないのですが……」

そうか、ハルカちゃんはあのへんなおじさんが実は28歳だっていうことを知らないんだ。

「……驚くかも知れないけど、あの社長、まだ28歳なんだよ」「うそ……！」

ハルカちゃんは店中に響き渡るような声を発した。よほど信じられなかったのだろう。完全に瞳孔が見開いていた。

「す、すみません……」

ハルカちゃんは自分でも信じられないくらいの中を出してしまったことを恥らい、顔を真っ赤にして小さくなった。ああ、なんてかわいいんだろう……

「わ、私、社長さんに会いたいです。お願いします。社長さんに会わせてください」

「う、うん。わかったよ……」

思わず了承してしまったが、困った。実際、変なおじさんとは友達でもなんでもないんだから。さて、どうしようか……。

俺はすっかり冷めてしまったボンゴレソースパスタを口に入れながら思案した。

23・カエデ

ふけさんとカラオケに行ってから10日後。私はふけさんに喫茶『パンヌス』に呼び出された。

「ごめん、待った？」

ふけさんは集合時間より30分遅れで喫茶『パンヌス』にやってきた。

「遅い！」

私は鬼の形相でふけさんを睨みつけた。

「ごめんよ。でもさ、今日はいいい報告があるから、それで許してよ」

ふけさんはやけに上機嫌だった。

「見て驚くなよ！ ほら！ すごいだろ！..！」

ふけさんは分厚いレポート用紙の束を私の顔に突きつけてきた。

「ちょっと！ 近すぎて見えないわよ！」

私はふけさんの手からレポート用紙の束を取り上げた。レポート用紙には

『「」当地アイドルによる地域活性化について 企画書』

と書かれていた。

「これは……？」

私の頭にはたくさんのクエスチョンマークが浮かんでいた。

24・ふけさん

「だから、君を^ご当地アイドルとして売り出すことが市役所内で決定したんだよ！」

私は状況を理解できていない少女に向かって力説した。私はもつと少女が喜んだりアクションをしてくれるだろうと期待していたので、少し熱くなっていた。

「……とりあえず、まとめると、私はアイドルとしてデビューできるわけ？」

「そうだよ！　すごいだろ!？」

「……この町名産の『^{あんこくちゅう}暗黒豆腐』をアピールするアイドルなわけ？」

「そうだよ。君も食べたことあるだろ？　味はいまいちだけど、見た目が真っ黒でインパクトは抜群さ！」

「……曲は誰が作ってくれるの？　歌詞は？」

「作曲家に頼むお金はないから、私達で作るんだよ！」

「それで、アイドル名は……」

「ズバリ！　『^{あんこくちゅう}暗黒豆腐少女』!!　どう？　いかした名前だろ？」

「……ごめん、ちょっと考えさせて。頭痛くなってきたから、」

私帰るわ。会計よろしく」

そう言つと少女は頭を抱えて、喫茶『パ Nusantara』の出口へと向かった。

「あれ？ おかしいなあ……」

私は少女のために、少女の喜ぶ顔が見たくて、企画書を何度も何度も練り直した。少女のスポンサーになってくる企業を必死に捜し歩いた。それなのに、少女は喜ぶどころか、頭を抱えてしまった……。私は自分の無能さが心底嫌になった。自己嫌悪に陥った。そのとき、

「……とりあえず、私のためにいろいろとしてくれたこと、感謝しているから。ありがとう。ふけさん、あんた私のファン1号だわ」

少女は独り言のようにそう呟いて、喫茶『パ Nusantara』から出て行った。

「うおおおおお！！！」

私はうまく表現できない、心のそこから湧き上がる感情をもてあまし、思わず叫んだ。

当然、喫茶『パ Nusantara』のマスターに「うるさい」と注意されたのは言うまでもない。

25・カエデ

「どっしょっしょ……」

私は喫茶『パ Nusantara』を後にしてからずっと悩んでいた。そう、これは紛れもないチャンスだ。今まで数多くのオーディションに落ちてきた私にとって、またとないチャンスなんだ。……なんだけど、『暗黒豆腐少女』はさすがにないだろうよ！ 売れるわけないじゃん！

「はあ……」

そう、これはまさにどろ舟に乗るようなもの。向こう岸に到着できる可能性は、ほぼ皆無。一度、ご当地アイドルとしてデビューしてしまったら、その印象はその後もついて回る。もし、失敗したら今後私が望むような正統派アイドルには、二度となれないかもしれない……

「カシユーナッツは好きですか」

ふと、アイドル『カシユーナッツ』の曲が聞こえてきた。駅前のパネル画面に映る、かわいらしい制服を着た3人の少女。広い舞台の上で可憐に踊るその姿を見て、心のそこからうらやましいと思った。

私も、あの子達と同じ舞台に立ちたい。向こう岸に、行きたい。たとえ、私の乗る舟がどろ舟だとしても、今すぐ舟に乗って漕ぎ出したい。

「ふうー……よし!!」

私は静かに深呼吸をし、決意した。

「今に見ているよ『カシューナッツ』め! この『暗黒豆腐少女』が、今に追い抜いてやるからな!」

私は電車の轟音にまぎれて、大きな声で画面越しの『カシューナッツ』に宣戦布告をした。

26・カエデ

「決めなければいけないことは、たくさんあるんだけど……」

今日も私はふけさんに喫茶『パ Nusantara』に呼び出された。

「とりあえず、1ヶ月後の8月31日に商店街でお祭りがあるから、そこでのパフォーマンスが『暗黒豆腐少女』の初デビューになる。その日までに最低でも、衣装と歌を完成させないといけない」

「1カ月後！？ 結構直ぐね。私も練習期間が欲しいから、最低でも3週間後までには曲を完成させないと……。ところで予算はどれくらいあるの？」

私はふけさんのおごりのハヤシライスをほおばりながら思案をめぐらせた。

「とりあえず、使えるお金は30万円だから、無駄遣いはできない。調べたところ、機材の準備に20万円くらいはやっぱりかかるらしい。だから衣装代は10万円が限度かな。衣装に関してはもう業者も見つけてあるから、どんな衣装にするか決めるだけでいいんだ」

「そう……じゃあやっぱり問題は曲ね。作詞は私達でできるとしても、作曲はそうはいかないものね」

「え？ カエデさん、作曲できないの？」

ふけさんはキョトンとした顔でたずねてきた。

「うん、無理」

「そっか……」

ふけさんは頭を抱えて悩んでいる様子だった。

「うん、わかった。曲については私が何とかするから。とりあえず、今は衣裳と歌詞、それとコンセプトについて考えよう」

ふけさんはアボガドサラダを食べながら、自らが考えるコンセプトを話し始めた。

27・ふけさん

「私のイメージは、『日本人形』なんだ」

「はい？」

少女は不思議そうな顔をしていた。

「今考えているのはミニスカートの浴衣を衣裳にして、髪は黒髪ロングで、オデコのところで直線にカットする。そして、キャラクターは暗めにして、時々ブラックな言葉を発する。キヤッチフレーズは『暗黒豆腐を食べなさい。じゃないと呪うわよ』みたいな感じで……」

「ちょ、ちょっと待って！ それ、本気で言っているの？」

「……そうだけど、なにか問題でも？」

「問題だらけよ！」

少女はハヤシライスの米粒を飛ばしながらもう抗議してきた。

「まあ、落ち着いて落ち着いて。これはあくまでも私個人の考えだから。カエデさんの考えもちゃんと取り入れるつもりだから」

私は飛んでくる米粒を華麗に避けながら少女をなだめた。

「そう、ならよかった。私はね……」

少女は再びハヤシライスの米粒を飛ばしながら、自らが理想とするアイドル像を話し始めた。

「ちよつと！ あんたさつき私の意見も取り入れるって言ったよね？ 言ったよね!？」

私は自分の考えがちつとも反映されないことに苛立ちを隠せなかった。

「確かに言ったけど、無理だつて！ 学生制服を着て、元気の出るような明るい曲を歌って、華麗なダンスを披露したところで、もう君の枠は今のアイドル界には存在しないんだよ」

「はあ？ なにそれ、あんた『正攻法じゃ私は敵わない』って言いたいのか？ 遠まわしに私には才能がないって言いたいのか？」

ふけさんは私の絶対的な味方だと思っていた。私のわがままを聞いてくれる人だと思っていた。私の才能を信じてくれる、唯一の人だと思っていた。それなのに、自分の考えを押し付けるだけ押し付けて、自分の思い通りに行かなくなると平気で約束を破る、そんな嫌なやつなのだと思った。腹が立った。

「そうじゃない！」

突然、いつも温厚なふけさんが、怒った表情でテーブルを叩いた。私はかなり驚いた。

「な、なによ……」

「そうじゃないよ……君はすごく才能がある。君はもつと世間に認められるべき人間だよ。少なくとも私は、心の底からそう思っています。」

でもね、世間はそんなに甘くないんだよ。君の望みが他の人の望みと同じとは限らない。君以外の人にも望みがあつて、その望みを叶えようと必死になっていることを知って欲しい。多くの人がそれぞれの望みを叶えようと、おしくらまんじゅうをしている、それが社会なんだよ。

自分の望みを叶えるには他の人の望みを踏み潰さなければいけない。時には譲歩して、自分を変えなければいけない。時には人を操らなければいけない。時には嘘をつかなければいけない……。そういった努力をして、初めて自分の望みが叶うんだよ。

だから、もうそろそろ君も自分を高めるだけの努力はやめて、自分の望みを叶えるために周りに働きかける努力をして欲しい。自分を変えてでも、望みを実現させる努力をして欲しい」

ふけさんは、何故か泣いていた。ふけさんの言葉は難しくてよくわからなかったけど、涙は本物だと思った。この人は本気で私のことを考えてくれているのだと思えた。この人を信じてみたいと思つた。

「わかった。ふけさんの言うとおりにやってみるよ」

『人を信じる』という行為はすごい。

一度その人を信じてしまえば、その人の考えや言動を信じることができる。自分の信じた人が信じたものを信じることができる。信じた人が出した答えを、自分の答えとすることができる。

それはつまり、自分が二人いるようなもの。信じる人が多ければ多いほど、私の世界は広がるんだ。そして、私のことを信じてくれる人が多ければ多いほど、私の望みは私を信じてくれる人の望みとなり、広がっていく。自分の望みを叶えるには、多くの人に信じてもらえる人間になればいい。私は、そういうアイドルになろう。

涙を流しながら喫茶『パンヌス』のマスターに怒られているふけさんを見ながら、私はそんなことを考えていた。

29・ふけさん(前書き)

各話のタイトルの人物がその話の主人公となります。話ごとに主人公がかわりますので、少し読みにくいかも知れませんが、ご了承ください。

29・ふけさん

「さてと、それじゃ行きますか」

夜もふけたころ、私はアイドルプロダクション『わっしょい』のオフィスに潜入するために、隣のビルの屋上にいた。

私は『暗黒豆腐少女』の曲をどうしようか考えた。自分達で曲を作ることは不可能であり、それならば、誰かに作ってもらうしかない。しかし、金がない。ならば……盗むしかない。

アイドルプロダクションには、おそらくボツになった楽曲が複数あるはずだという考えのもと、私はその楽曲を盗むことを決意した。……というか、またいつものように思ってしまったのだ。

『ルパン三世のようにビルに潜入して、楽曲を盗むことができれば、楽しそうだ』と。

そして、一度そう思ってしまつと実行せずにはいられないのが、私という人間なのだ。

そう言う理由で今、私は全身黒タイツを身にまとい、隣のビルの屋上からアイドルプロダクション館内へ侵入するためにロープを手にとっている。この日のために、ルパン三世DVDボックスを購入

して、勉強してきたのだ。絶対につまぐいくはずだ。

「ふん！ ふん！ はっ！」

私はルパン三世顔負けのロープさばきでアイドルプロダクション『わっしょい』の屋上の柵目掛けて、ロープを放り投げた。

「よし！」

私の投げたロープの先の”わっか”が、見事にアイドルプロダクションの屋上の柵に引っかった。

「ん！ んっしょ！ ……よし、これだけ固く結べば大丈夫だろう」

私は今いるビルの屋上の柵にもロープの端をくくりつけ、ビルとビルの間にも、一本のロープをまるで橋の様にピンと張ることに成功した。

「うんしょ、うんしょ！ よし！ これなら大丈夫」

私はロープが外れないのを確認してから、慎重にロープに捕まった。そして、宙ぶらりんになりながら、今いるビルとアイドルプロダクションとの間を渡り始めた。

「びゅーうううー！」

冷たい夜風が吹き付ける。地面まで垂直距離で30メートルはあるだろうか？ 落ちたらただでは済まないぞ……。そう思うと、急に体が震えだした。そのとき、

「はぁ……疲れた」

今日はいつもより忙しい日だった。プロモーション活動や定期公演、さらにはプロダクションオフィス館内のスタジオでダンスのレッスン。

気がつくともう、今日が終わろうとしていた。アイドルという仕事も楽じゃないなあ……。私は窓から顔を出し、夜風に当たりながらそんなことを考えていた。

「はぁ……」

そして、6メートルくらいの距離にある、隣のビルの窓に映る少し疲れた自分の顔を見て、ため息をついた。

「はやく、社長さんに会いたいなあ」

私はそんな願い事を呟いた。

「うわぁあああー!!」

すると、私の願いが通じたのか、目の前に社長さんが現れた。そして、一瞬で消えていった。

「え!?! え、ええ!?!」

幻覚!? でも、幻覚にしてはリアルだったような……。私が一

瞬のありえない出来事に驚いていると、

「ピピピピピピ！ ピピピピピピ！」

けたたましい警報音がプロダクション館内に鳴り響いた。え？
今度はなに？？

「ハルカちゃん、みつけた……」

私が振り返ると、そこには”ハルカ LOVE”と書かれた、アイドル『カシユーナッツ』の限定Tシャツを着た、気味の悪いおじさんがいた。

おじさんはカッターナイフを持っていて、そのカッターナイフからは真紅の血がぼたぼたと滴り落ちていた。

31・警察官川島

「はい、わかりました！ 直ぐに向かいます！！」

俺は通報を受けて直ぐにパトカーに乗り込み、アイドルプロダクション『わっしょい』のオフィスビルへと向かった。なんでも、アイドルのストーカーがオフィスビル内でカッターナイフを振り回して暴れているとのことだった。確かアイドルプロダクション『わっしょい』はハルカちゃんが所属しているプロダクションだったはず。

ハルカちゃん、大丈夫かな……。

俺はハルカちゃんのが心配になり、少しでも急ごうとアクセスを強く踏み込んだ。

32. ふけさん

「さて、どうしようか……」

読者諸君、私の心配をしてくれてありがとう。でも、大丈夫。こんなこともあるかと、ちゃんと命綱を巻いていたのだ。そのおかげで、私は無事だ。無事なのだが、困ったことに、今空中で宙ぶらりんの状態であり、そこから抜け出せなくなってしまったのだ。

「ふん！ ふんふん！……」

私は体を揺り動かし、振り子の要領でアイドルプロダクション『わっしょい』のビルの窓に手をかけようと努力した。

ラッキーなことに、一番近くにある窓が開いている。あそこから進入しよう。

私はそんなことを考えながら、まるで“ミノ虫”みたいに必死に体を動かした。

「あと、あと少し……」

私の振り子運動は徐々にエネルギーを増して行き、あと一息で窓枠に手が届くまでになった。

「きゃあああ……」

私がいっぱい体を揺り動かし、窓に向かって突っ込んだとき、女性の悲鳴が聞こえた。何事だ！と思った瞬間、カッターナイフを持った謎のおっさんが急に目の前に現れた。

「もげえ！！」

そして、そのおっさんの顔に、振り子のエネルギーを蓄えた私の頭蓋骨が激突した。

33・ハルカ

「きゃああああー!!」

気味の悪いおじさんはカッターナイフを振りかざし、私に向かってきた。私は怖くて目を瞑り、とっさに窓を背にして身をかがめた。

「もげえー!!」

もげえ……? 「もげえ」という滑稽な声を不思議に思った私は恐る恐る目を開けた。すると、気味の悪いおじさんは何故か気を失って倒れていた。

「いったい……」

私が状況を理解できず、キョトンとしていると、

「ちょっと、そこのお嬢さん。悪いけどそこにあるカッター取ってもらえる?」

窓の外でロープに吊られている男性に話しかけられた。

「……社長さん?」

その男性は、紛れもない社長さんだった。

「はやくしてくれるかな? 結構つらいんだよね、ロープで吊られるのって」

34・警察官川島

俺が到着したときには、もうすでにストーカーは取り押さえられたあとだった。

「それじゃあ、こいつはハルカさんのストーカーだったんですね。……ハルカさんは無事だったのでしょうか？」

「無事でしたよ」

俺は思わず胸をなでおろした。

「それじゃ、このストーカーは俺が署まで連れて行くから、あとのことはよろしくな」

一緒についてきた先輩が、一足先に犯人を連れて行った。ストーカーの背中には『ハルカ LOVE』という文字があった。その文字を見ると、なんだかストーカーのことを憎めない自分がいた。

「それじゃあ、報告書を書くために、状況を聞かせて欲しいのですが。あと、現場も見せてください」

俺はとりあえず、自分の職務を全うすることにした。できることなら今すぐハルカちゃんに会いたいのが、それは叶わぬ夢。業務を終えたらメールでもしよう。

俺はそんなことを考えながら報告書を鞆から取り出そうとした。そのとき、ハルカちゃんのマネージャらしき女性に声をかけられた。

「あの、お忙しいところ申し訳ないんですが、ハルカを家まで送り届けてくれませんか？ ハルカ今、すごくおびえているんです。警察の方なら安心ですし……」
「はい！ 任せてください！」

俺は報告書を鞆に押し戻し、即答した。

35・ふけさん

「さてさて、お宝はどこかな？」

無事に地上に降り立った私は、アイドルプロダクション『わっしよい』のビル内に潜入した。詳細はわからないが、なにやら事件があつたらしく、そのゴタゴタに紛れることができた。

「ここが怪しいな」

私は「倉庫」と書かれた部屋を見つけ、特に深く考えずにその部屋に入った。倉庫の中は薄暗く、少しかび臭いにおいがした。およそ10畳くらいの部屋には銀色の棚が並んでいて、そこには衣類や小物が雑然と置かれていた。

「あのダンボールが怪しいな」

私は倉庫の奥のほうにあるダンボールに目をつけた。そのダンボールからは黒いカセットテープがあふれ出していた。私はそのダンボールを取り出そうと、奥の暗がりへと向かった。

「あの……どちら様ですか？」

倉庫の隅。闇の中。ゆれる黒髪。鈍い光を放つ眼鏡。その眼鏡の奥にある、淀んだ瞳と目が合った。私は思わず「わぁ」と叫んだ。すると、黒髪眼鏡の女性も「わぁ」と叫んだ。

「す、すいません。驚かしてしまいましたね。私、高橋未実たかはしみみと申します。倉庫の管理人です」

黒髪眼鏡の女性はすくつ、と立ち上がり、そう言ってお辞儀をした。そのとき、私は不覚にもドキツとしてしまった。立ち上がった彼女の細長く色白な手足に。そのシュツとした美しい輪郭に。そして、そのへたくそな笑顔に。

こんなにも笑顔のへたくそな人がいるのかと思うほど、彼女の顔は引きつっていた。このへたくそな笑顔、どこかで見たとあるような……。私は顔面痙攣でもしているのかと思うほどピクピクした表情筋を見ながら記憶をたどった。

「……………あなたもしかして、占いアイドル『クリスタル』の『ミミ』さんですか？」

黒髪眼鏡の女性は小さく「はい」と呟き、ゆっくりとうなずいた。

36・アイドル研究者

占いアイドル『クリスタル』

アイドル研究者の間では、有名なアイドルグループの一つである。アイドルプロダクション『わっしょい』に所属していた。

メンバーは、未来を見ることが出来る（という設定の）『ミミ』、過去を見ることが出来る（という設定の）『ミカ』の二人。明るいアイドルが多い中、「暗さ」を売りにした数少ないアイドルグループであり、デビュー当時からそのキャラクターは話題を呼んでいた。

そんな彼女達の一番の魅力は「占いができる」という設定であることは言うまでもない。しかし、そんな特技一つで乗り切れるほど、アイドル業界の波はやわくない。最初こそはその面白い特技に業界が食いついた。しかし、ある程度するとすぐに飽きられてしまった。それはある意味、アイドルの運命なのかもしれない。

そんな中、何とか人気を保っていられたのは他ならぬ、『ミミ』の存在あつてのことだろう。『ミカ』ははっきり言ってかわいくなかった。太っていたし、顔もアイドル水準を満たしていなかった。それに、がさつで品がなかった。ただ、しゃべりが達者で人に取り入るのがうまかったため、何とかアイドルとして生き延びることができていた。

その反面『ミミ』は超美形で色白、さらにスタイルが抜群に良か

った。歌唱力もすばらしく、何より品があった。アイドル研究家の私から見ても、過去から現在を通して5本の指に入るほどのアイドルポテンシャルの持ち主だった。しかし、そんな『ミミ』にはアイドルとしての致命的な欠点がいくつかあった。まず、笑顔がへつたくそだった。その笑顔はあまりにも酷く、ネットでは『顔面麻痺』というあだ名で『ミミ』の引きつった顔の画像がネタとして多く使われた。さらに、声がとても小さく、閉鎖的で、うまく人に取り入れることのできない人間だった。人に何か頼みごとをすることのできない人間だった。

それは、アイドルとして致命的だった。アイドルとは人に頼みごとをする仕事であり、人をお願いをする仕事なのだ。自分という存在を押し付ける仕事なのだ。でも、『ミミ』はそれができない人間だった……。

結果的に、占いアイドル『クリスタル』は結成から5年で解散を向かえた。『ミカ』のアイドルとしての実力不足と『ミミ』の社交力の低さを考えれば、まあ、長続きしたほうだと私は評価している。

ちなみに予断だが、『ミミ』は今現在アイドルプロダクション『わっしょい』の社員として働いている。そして、『ミカ』は、女優として体をはっている……当然、まっとうな女優ではないことは、賢い読者諸君ならおわかりだろう。アイドルの水準を満たしていない賞味期限切れの女が行きつく先は……はあ、想像したくもない。

アイドルのその後ほど、残酷なものはない。私はそんなことを考えながら、締め切りギリギリでコラムの記事を書き上げた。

37・ふけさん

「ところで、あなたはどちら様ですか？ 何の用があつて、めつたに誰も来ない倉庫にいらしたんですか？」

「あえ……実は……そ、そう！ 私はプロデューサーです。実は過去にボツになつた音源を捜しに来たのですが……」

私はミミさんの問いに答えるため、とっさに嘘をついた。まあ、いつものことだ。

「……それでしたら、こちらのダンボールにありますので、どうぞミミさんはか細い両腕で、大き目の段ボール箱を棚から下ろそうとした。私はミミさんの細い腕が折れてしまうのではないかと思ひ、ハラハラした。

「ああ！」

案の定、ミミさんのか細い腕ではダンボール箱を支えることができず、棚の上からカセットテープが大量に入ったダンボール箱が落ちてきた。

「危ない！」

私はとっさに腕を伸ばし、ミミさんを抱きしめて落下するダンボールから守った。

「ありがとうございます……」

「ミミさんの顔が近い！ う、美しい！」

「あ、す、すいません……」

私はとっさのこととはいえ、ミミさんを抱きしめて恥ずかしくなり、直ぐに手を離れた。

「ははは、あ！ こ、これですね。では、いただいていきます。それじゃ」

私はテレを隠すように、地面に散らばったカセットテープの中からテキトウに1つ手に取り、その場から逃げようとした。

「ちょ、ちょっと待ってください……！」

不意に、ミミさんに呼び止められた。もしかして、愛の告白かい？ ベイビー。俺にほれたら、火傷じゃすまないぜ！

「何で全身黒タイツ姿なのですか？」

「……最新のオシヤレです」

「私、これでも勤勉な性格でして、社員の方全員の顔と名前を把握しております。しかし、あなたのことは知りません。それに、あなたのその格好……まるで、映画に出てくるような泥棒にしか見えないので……」

私は直ぐに身をひるがえし、全速力で倉庫の出口に向かって走った。やばい、ばれた。

「あ、あの！ ちょっと待ってください！ これ……」

ミミさんは、か細い声で何かを叫んでいたが、私は聞こえないフリをして逃げ出した。

「ハルカさん、怖かったでしょう。でも、安心してください。僕が無事にあなたの家まで送り届けますから！」

「ありがとうございます」

警察の川島さんが私をパトカーで送ってくれることになり、私はパトカーに乗り込んだ。パトカーに乗るなんて、なかなかできない体験だわ。私は社長さんと出会えたうれしさとあいまって、かなり興奮していた。

「しかし、ゆるせませんね、あのストーカー。ハルカさんのことを大好きな気持ちはわかりますが、危害を加えるのは愛情の表現ではないですよ。欲しいものが自分の手にはいけないことが、我慢できない。ガキみたいな最低なヤツですね」

車中、川島さんはずっとしゃべっていた。きっと、川島さんなりに気を遣ってくれていたのだと思う。でも、申し訳ないことに、このときの私には川島さんの気遣いに応えるだけの余裕はなかった。

「僕なら、我慢しますね。そりゃ僕だって男ですから、欲の一つや二つありますけどね。でも、人を傷つけてまでかなえる欲望に、僕は嫌気がさしたんです。だから、警察官になったんです。」

人は、何か一つ欲望を我慢するだけで、平和に暮らすことができると。一人の我慢は微力かもしれませんが、60億人の我慢は世界平和につながるんです。みんながそれぞれ、一つでいいから欲望を叶えることを我慢する。その助けができる仕事、それが警察官

だと思っんです」

我慢……かあ。私には、無理かもしれない。私は見た目おとなしいと言われることが多いけど、実は野心家で、自分の望みをあきらめるのが嫌いな人間だから。今だってそう、社長さんに会ったことで、社長さんに対する思いはさらに強くなった。この思いを我慢するなんて、我慢しながら生きるなんて、無理だ。

「川島さん……この前お願いしたことなんです……」

「ああ、社長さんに会いたいんだっけ？　ちょ、ちょっと待ってね。あいつ、ほら、い、忙しいみたいでさ。もうちょっと、時間かかるかなあ……」

「そう、ですか……川島さんは社長さんの好きなものとかわかりますか？」

「え、えつと……あ、ほら！　ハルカさんの家にもう着きましたよ！　僕はまだ仕事が残っているので、失礼します。それじゃ、今日はゆっくり寝てくださいね」

私をパトカーから降ろすと、川島さんは逃げるように、アイドルプロダクション『わっしょい』に再び向かった。

「どうしたんですか!？」

俺が再びアイドルプロダクション『わっしょい』に戻ると、玄関ホールには人ばかりができており、騒然としていた。

「もう一人、不審者がいたんですよ! ほら! こいつ全身黒タイツ姿で怪しいでしょ!? それに凶器のカッターナイフも持っているんですよ!!」

「違う! そのカッターナイフは拾ったものだ! この全身黒タイツはただのオシャレだ!! レディー・ガガの奇抜なファッションが認められて、何で私の全身黒タイツは認められないんだ!! 不公平じゃないか!!」

全身黒タイツの男……紛れもない、「変なおじさん」だ。ハル力ちゃんが「社長さん」と呼ぶ、田中敬一という変人だ。まさか、こんなところで出会えるとは……。

このとき、俺の脳裏に悪い考えが浮かんだ。私利私欲を叶えるための、悪い考えが。しかし、俺は欲望を抑える手伝いをするために警察官になったのだ。そんな俺が、自分の欲望を叶えるために、この悪い考えを実行するわけにはいかない……。しかし、このままでは、ハル力ちゃんとの約束が、関係が……。

「ご協力感謝します。この男は私が責任を持って、署まで連行します。それでは!」

「くそ！ 離せ！ また、お前か！ 国家の犬め！ コンチクシヨウー！」

俺は暴れる田中敬一を無理やりパトカーの助手席に押し込み、すぐにパトカーを発進させた。そして、アイドルプロダクション『わっしょい』から数百メートルくらい離れたところで口を開いた。

「おい、田中敬一。おまえ、今回は見逃してやる。そのかわり……俺と友達になつてくれ！」

心の善と悪の葛藤は、あっけなく悪が勝利した。いくら口で偽善を言おうと、人は自分の欲望を抑えることができない。だから、世界はいつまでも平和にならないんだ。

俺は世界不平和の原因の一端と成り果てた自分自身を軽蔑しながらも、田中敬一と偽りの友情を交わした。

40・カエデ（前書き）

各話のタイトルの人物がその話の主人公となります。話ごとに主人公がかわりますので、少し読みにくいかも知れませんが、ご了承ください。

40・カエデ

『 』

「すごい！ これ、すごくいいメロディーだよ！ 誰に作ってもらったの？」

私はふけさんが持ってきたカセットテープの音源を聞いて、興奮した。アイドルらしい、ポップでキュートなメロディー。私は、一瞬で心を奪われた。

「いや、その……と、友達に作曲家がいてね……」

「なんて人？ 一度お会いしたいなあ」

私はこんなステキなメロディーを作れる人に会ってみたいと思った。

「いや、それはちょっと難しいかな……」

「えー、なんで！ いいじゃん！ 友達なんでしょ？」

「う、うるさい！ そんなことよりも、問題は歌詞だよ歌詞！ 歌詞をこれから僕達で作らなくちゃいけないんだからね」

ふけさんは少し怒ったような口調でそう言うと、原稿用紙とボールペンを取り出した。

「はい、これ使って。とりあえず、一人で考えてみて。私も考えておくから。明日またここに集合ということ。それじゃ」

ふけさんは約2週間後に控えた『暗黒豆腐少女』デビューライブ関係の仕事がたくさんあるらしく、そそくさと帰り支度をした。そして、去り際

「『暗黒豆腐』を必ず歌詞の中に入れてね。それじゃ」

と言って、喫茶『パンヌス』から出て行った。

41 警察官川島

「いったい何の用だ？ 私は忙しいのだが」

明らかに不機嫌な表情で田中敬一はやってきた。

「今日は打ち合わせだよ。お前、アイドル『カシューナッツ』を知っているか？」

「知らん。『暗黒豆腐少女』以外のアイドルに興味はない」

田中敬一は即答した。

「あっそ。まあいいや。とりあえず、お前は俺の言うとおりに行動してくればそれでいい。言っとくけど、お前を捕まえようと思えばいつでも捕まえられるんだからな。ちゃんと俺の言うことを聞けよ」

俺は、自分の方が田中敬一よりも立場が上であることを改めて諭した。

「……ふん、わかったよ。お前の言うとおりに『友達ごっこ』に付き合えばいいんだろ？」

田中敬一は不満が顔に出ていたが、しぶしぶ俺の要求に応える決意をしたようだった。

「わかればよろしい。それじゃ、本題に入るぞ。お前がさっき知ら

ないと言ったアイドル『カシューナッツ』のハルカちゃんが、お前に会いたいと、言っている」

「私に？ ……なぜ？」

田中敬一は腑に落ちない表情をしていた。

こんなアホ面のおっさんに、なんでハルカちゃんは会いたいんだ？ くそ！ こんなおっさんよりも、絶対に俺のほうがいい男はずなのに……。

俺はそんなくすぶる感情を抑えながら話を続けた。

「理由は知らんが、お前のことをアイドルプロダクション『わっしよい』の社長だと、勘違いしているんだ」

「……私が社長？ ますます、わからん」

「とにかく、お前は社長で、俺の大学時代の同級生なんだ。いいな？ あと、実際にハルカちゃんに会うときは、俺のことをほめる！ ほめてほめて褒めちぎれ！ それでだな……」

俺はこんな感じで、田中敬一に指導を続けた。

42・カエテ

『申し訳ない、今日も会えません。歌詞の話は明日しましょう』

ふけさんから、こんな味気のないメールが届いた。歌詞を書いておくようにと言われてからすでに3日経つ。ふけさんも忙しいのはわかるけど、歌詞が完成しないと、もともこないんだからね！わかつているのかしら？ ふんすか！

喫茶『パンヌス』のいつもの席。私は真っ白なノートを前に、イライラしていた。3日間必死で考えたのだけれど、あの素敵なメロデーにあう歌詞が思い浮かばなかった。正直、歌詞を生み出すことの出来ない自分を腹立たしく思い、落ち込んでいた。

だから、今日はふけさんに相談したかったのに……なんで来ないんだよ、あのバカ……。

「ああああ！！ もう！ ここでウジウジしていても、何も出てこないわ！ マスター！ お勘定！」

私はお勘定を済ますと、喫茶『パンヌス』を飛び出した。そして、『暗黒豆腐』を売っている豆腐屋『白角』はっかくへと向かった。

ふけさんから、「一度あいさつに行くように」って言われていたし、もしかしたら、何か良い歌詞のヒントがあるかもしれない！ 私はイライラする気持ちを抑えながら、早足で歩いた。

「ここかあ……派手な店だなあ。豆腐屋に見えないし」

目がチカチカする蛍光色。『白角』と書かれたド派手な看板。店の雰囲気とミスマッチなビートルズのBGM。ここは、サーカスか！ そう、突っ込みたくなるような、へんてこりんな店。私は、この珍妙な店の豆腐を宣伝しなくちゃいけないのか……。何故か私がつくりしてしまった。

「こんにちは……」

私がつくりしたテンションのまま、店内へと足を踏み入れた。

「らっしやい」

少しコワモテのおじさんが店番をしていた。

「あの……私、ここの『暗黒豆腐』を宣伝させていただきます、アイドルの……」

「ああ！ あんたカエデちゃんかえ？ ふけさんから、聞いたんだよ。曲作りは順調かえ？ お楽しみにとるだよ。それにしても、ベッピンさんだねえ」

コワモテな表情からは想像できないような高い声、しかもなまっただ口調で、店主らしき人が話しかけてきた。

「はあ……、まあ……」

「今日はどしたね？」

「いや、良い歌詞が浮かばなかったので、『暗黒豆腐』を実際に見てみようと思ひまして……」

「ほうか、ほうか。好きただけ見ていつて頂戴。好きただけ試食してもらってもかまわんたい。なんたつておじょうちゃんは、うちの大事な『アイドル』だからね」

「はあ……それじゃ、遠慮なく」

私はやけにフレンドリーなおじさんとの会話を早々に打ち切つて、豆腐とにらめっこを始めた。

「うわ……黒くて気持ち悪い……」

真っ黒な『暗黒豆腐』を見て、私の食欲は減退した。

「ほれ、食つてみな」

ありがた迷惑な店主が真っ黒な豆腐を私に差し出してきた。

「あ、……はい」

さすがに、断るわけにもいかないなので、私は『暗黒豆腐』を口に放り入れた。

「どうだ？ うめえーだろ？」

「……おもしろい……味ですな」

お世辞にも「おいしい」と言えない、なんとも不可思議な味の豆腐。おそらく海産物が含まれているであろうその黒い肉体は、噛めば噛むほど豊かな生臭さが鼻腔を通り抜け、嘔吐中枢を刺激する。

「ほれ、まだいっぱいあるから、どんどん食べなって」

おせっかいな店主は『暗黒豆腐』を次々と私の口に押し入れてきた。

「はぐっ。もぐもぐ……」

不味い。

「ほれ、まだあるだよ」

「はぐっ。もぐもぐ……」

吐きそう。

「こっちは茹でたやつだん。おいしいぞう」

「はぐっ。もぐもぐ……」

辛い。

「麻婆豆腐にも、あうんだで」

「はぐっ。もぐもぐ……」

もう、お腹パンパン。

「ワサビ醤油で食べると、また格別だで」

「はぐつ。もぐもぐ……」

誰か、助けて……。

おせっかいな店主のおせっかいなサービスは止まる気配がなく、次々と黒い豆腐が運ばれてくる。私は怒りにも似た感情を抑えつつ、無言で豆腐を食べた。これもアイドルになるためだ……。私はそう思い、必死に耐えた。

「はぐつ。もぐもぐ……」

おい、じじい

「はぐつ。もぐもぐ……」

いいかげんに

「はぐつ。もぐもぐ……」

しろよ

「はぐつ。もぐもぐ……」

……もう、限界だった。頭の中で「ブチッ」と何かが切れる音がした。気がつくとき、私はスポンサーである豆腐屋の店主の胸ぐらを掴んでいた。

「じじい!!! 不味まずいいんだよ!!! こんな生臭ませえ豆腐、誰が食つかあああああああ!!!」

私は店主をぶん殴り、豆腐屋『白角』から飛び出した。

43・ふけさん

『ふけさん、ごめん。店主殴った』

「ぶはぁうわううう!!!!」

私はカエデさんからのメールを読んで、思わず飲んでいたコーラを噴出した。

「おい！ 田中敬一汚いぞ！」

「すまん、友よ。急用ができた。サラバ！」

私は直ぐに荷物をまとめて、席を立った。今日も川島くんに拘束されていたのだが、これは一大事。川島くんにかまっている暇はない。

「おい！ まだ話は終わってないぞ！ 捕まえるぞ、この野郎！！
お……」

背後で川島くんの声が聞こえた気がしたが、きっと空耳だろう。私は大学以来の親友であり、今現在警察官として立派に働いている川島くんに心の中で「サヨナラ」と別れを告げて、喫茶『パンヌス』へと急いで向かった。

「カエデさん!? いったいどういうことなの!? ……カエデさん?」

喫茶『パンヌス』のドアを勢いよく開けて、困惑の思いを叫びながら、私はいつもの席を見た。そこに、カエデさんの姿はなかった。

「カエデ……さん? どこにいるの?」

「やあ、ふけさん遅かったね。カエデちゃんなら、さっき救急車で運ばれたよ」

「えー!! ということマスター!? どの病院? 何があったの? 怪我? 病気? 事故? 何があったの!?!」

私はマスターの胸ぐらを掴み、大きく揺さぶり、真相を求めて詰め寄った。

「うげえ……ぐ、ぐるぢいよ……」

「ねえ!! マスター!! 答えてよ!!」

「ぐう……がほお!!」

「どういうことなんだよ! マスター! 何とか言ってくれよ!!」

「……………」

数分後、マスターは何故か^な気を失い、倒れた。カエデさんだけでなく、マスターの身にまで災いが起こるとは……。

何か狂い始めている。私はそう思わずにはいられず、とりあえず救急車を呼び、マスターの胸元についている私の指紋を拭き取り、ことの一部始終を見ていた客に賄賂を渡して退店してもらい、喫茶『パンヌス』の店先に「本日の営業はマスター不在のため休止致します」と書いた紙を張った。

「ピーポーピーポーピーポー」

そして、救急車が喫茶『パンヌス』にやってくると、救急隊員に「どうやら喫茶『パンヌス』の経営がうまくいかず、マスターは自殺を図ったらしい」

と虚偽の状況を説明し、気を失ったマスターと共に、私は救急車に乗り込んだ。

44・カエデ

「ただの食べすぎですね。安静にしていれば直ぐに良くなりますよ」

そう言うと、お医者様は病室を出て行った。

「……気持ちわる。暗黒豆腐、食べ過ぎた」

私は豆腐屋『白角』の店主をぶん殴って直ぐ、ふけさんにメールを送り、いつもの喫茶『パンヌス』でふけさんのことを待っていた。ふけさんなら、直ぐに駆けつけてくれると思ったから。

ふけさんを待っている間、マスターに愚痴を聞いてもらっていたのだけれど、急に気持ちが悪くなって、意識が朦朧とした。私はマスターに助けを求めて、救急車を呼んでもらった。そこらへんから記憶がなくて、気がつくとは病室のベッドの上だった。

「はあー……やっちゃまった。夢じゃないんだよね……」

私は、「あんなに不味い豆腐を食わせる店主が悪い！」と思いつつも、軽率であった自分の行為を悔いた。さすがに殴るのは、まじくできなかった。

「カエデさん！ いったいどういふことなの！？ 説明して頂戴！
！！」

私が反省していると、突如、病室にふけさんがやってきて私はび

っくりした。

「どしたのどしたのどしたの!?! 何で殴っちゃたの!?!」

ふけさんはかなり取り乱している様子だったので、私は気持ちを落ち着かせてから、ことの顛末てんまつを説明した。

45・ふけさん

「ごめん、店主殴った」

少女は語る。

「歌詞が全然思い浮かばなくて、むしろくしゃしてた」

私は頷く。

「豆腐屋に行つて、実際に『暗黒豆腐』を見れば、歌詞が思い浮かぶと思つた」

少女は語る。

「そしたら、店主がなれなれしい態度で近寄つてきたの」

私は頷く。

「最初から、いけ好かないヤツだとは思つてた。でも、私我慢したんだよ。ふけさんの努力を無駄にしないように」

少女は語る

「でも、あの店主、糞不味い『暗黒豆腐』を無理やり私に食べさせて」

私は頷く。

「私、我慢できなくなって、殴った。ごめんね、ふげさん」

少女は語る。そして、謝罪する。私は、「もう終わったことはしようがない」と少女を慰めようとした。少女が「でもね」というまでは……。

46・カエテ

「でもね、ほんとうに不味かったのよ、あの豆腐。糞まず、ゲロま
ずよ。私、あんなに不味い豆腐のアイドルにならなくて良かったと
思う。ほんとうに。だって、あんなに不味い豆腐に未来はないもん
ほんと、あんなに不味い豆腐を作っている店主、頭おかしいんじや
ないの？ あんな豆腐でこの先やっていけると本当に思っているの
かしら？ ありゃ、クズだね。人間のクズだよ。だって、あんなに
不味い豆腐を作って、人様に売って、金をもらおうとしているんだ
よ！？ 信じられる？ あたしゃあ信じられないね……」

私の口から、罵詈雑言が溢れ出る。あれ？ あたしって、こんな
に饒舌だったけ？ あたしは何で、間を空けず、心にもないことを
しゃべっているのだろう？

私がそんなことを考えていると、ふけさんが、怒鳴りだした。

「君は何を見てきたんだ！！」

ああ、そうか……。私は、ふけさんに怒鳴られるのが怖くて、ふ
けさんの期待を裏切ってしまったことが悲しくて、間を空けずに罵
詈雑言を吐き出していたんだ……。

「ああ、確かに不味いよ。私も食べた。生臭かったよ。でもなあ、
なんでそのまじい豆腐を店主が売っているか、君は疑問に思わなか
ったのかい？ その不味い豆腐を買っている人の気持ちを考えなか
ったのか？ 君は表面だけをみて、その裏にある真実をちゃんと見
極める努力をしたのかい！？ ……上辺だけを見て、感情だけで行

動する人に、アイドルは務まらないよ」

ふけさんの言葉、痛かった。

「……失礼する」

ふけさんは病室から出て行った。私は一人、病室に取り残された。

47・ハルカ

『8月31日、久しぶりに休みをいただけることになりました。ですので、その日に社長さんを紹介していただけると、うれしいのですが……』

「よし、送信っと」

私はいつまでも確信的な返事をくれない川島さんに、催促のメールを送った。

「……………」

いつもなら、私がメールを送った1秒後に返信が来るのに……。明らかに返信が遅い。川島さん、困っているのかなあ……………。

私は何の気なしに服を着替えた。上にはピンク色のタンクトップを着て胸の谷間を強調し、下は超短いホットパンツをはいた。そして、かなりセクシーな印象のメイクを顔に施し、一枚写メを撮った。

『8月31日、お願いしますね』

そして、先ほど撮ったセクシーな写メを添えて、もう一度催促のメールを送った。

『了解しました!! まかせてください!!』

今度は私がメールの送信ボタンを押した0.05秒後に返信が来

た。

ちなみに、セクシーな写メを添えた理由は、ただなんとなくです。他意はないですし、ましてや悪意や策略など、微塵も含んでおりませんので、ご了承ください。

私は病院を後にし、家に帰った。そして、『暗黒豆腐』について自分なりに調べてみた。

『暗黒豆腐』、

それは豆腐店『白角』の商品。その名のとおり黒色をした豆腐である。本来白はずの豆腐の身も心も黒く染めているのは、主に海草である。詳しいことは企業秘密ということになっている。味は…どこを調べても「不味い」とか「生臭い」といった評価ばかりだ。私も実際に食べてそう思った。

そんな『暗黒豆腐』だが、そこそこ人気がある。それは何故か？その答えは、“『暗黒豆腐』応援サイト”にあった。よくよくパソコンで調べてみると、“『暗黒豆腐』応援サイト”と呼ばれるものがいくつも見つかった。そのサイトでは、「どうやったら『暗黒豆腐』をおいしく食べられるか？」という議論が交わされており、『暗黒豆腐』を用いたレシピが多数紹介されていた。

そう、『暗黒豆腐』にそこそこ人気がある理由、それは豆腐自体のおいしさや面白さが要因ではなく、不味い『暗黒豆腐』をどうにかしておいしく食べようと努力する消費者にあったのだ。消費者達が互いに知恵を出し合ってレシピを考えたり、考えた料理を実際につくって食べた感想を話し合ったりする。そうして、消費者が育てていく豆腐、それが『暗黒豆腐』だったんだ。

ここで何故『暗黒豆腐』をおいしく食べようと努力する消費者達が現れたのか？ という疑問が浮かんだ。だって、他においしい食べ物が増えている現代、不味い食品をおいしくする努力をしてまで食べる必要はないと思うから。私はその疑問を解決したくて、さらに調べた。調べているうちに、私は“『暗黒豆腐』応援サイト”の中から、『暗黒豆腐』誕生逸話の記事を見つけたので、読むことにした。

【 『暗黒豆腐』を発売する前の豆腐屋『白角』は、繁盛しておらず、泣かず飛ばずな状態であった。店主の安岡吉次郎は野心家で、奇抜な豆腐を作っては失敗して借金を増やしていた。生クリームを練りこんだ『生クリーム豆腐』、辛子明太子を練りこんだ『明太豆腐』、麻婆豆腐を練りこんだ『麻婆豆腐』などなど、一時期、奇妙な豆腐ばかりが店頭に並んでいた。そんな時に『暗黒豆腐』も誕生したのだ。当然『暗黒豆腐』も売れなかったが、妻のキミ子は「おいしい、絶対に売れるよ」とただ一人、必死に吉次郎を励ましていた。吉次郎は「おう！ 今度こそ、この『暗黒豆腐』で繁盛させてみせる！ それで、お前に楽させてやるよ」とキミ子と約束をしていた。しかし、その約束が果たされる前に、妻キミ子は

私は、思わず画面をスクロールする手を止めた。『暗黒豆腐』誕生の逸話。そこには、「不味い」の一言では語れない、理由があった。ドラマがあった。人の心があった。私はそんな裏話を知ろうともせず、表面だけを見て、「不味い」と罵声を浴びせたんだ……。

私は自己嫌悪しながら、『暗黒豆腐』誕生逸話の続きを読んだ。

【 妻キミ子死後、約束を果たすために吉次郎は売れない『暗黒豆腐』を必死で作りに続けた。その必死な姿に心打たれた仲間達が、どうにかしておいしく『暗黒豆腐』を食べられないかと、必死に考

えて、いろんなレシピを考案したことが、この『暗黒豆腐』が売れるきっかけになったのである　　】

……そうか、だから『暗黒豆腐』は不味くても売れるんだ。いろんな人の“必死”がこもった豆腐だから、売れるんだ。……私は、アイドルとして、“必死”になれているだろうか？

そんなことを考えながら、私はもう一度、深く自分の行動を反省した。

によって盲目状態に陥っているハルカちゃんに対して、俺がどんなにアプローチしようとも意味がない。路傍の石ころに愛をささやかれても、気持ち悪いだけ。それも、わかっている。わかっているよ！でもさ！わかってはいるからといって、それが何だっていうんだよ！！路傍の石には路傍の石なりのプライドがあるんだよ！最後に笑うのが、石ころだっていいじゃないか。だって、石ころが笑っていたところで、誰も気付かないし、世界に変化をもたらすものでもないのだから。だから俺は、ニコニコ笑う石ころになる。

俺は欲望を抑えることが、世界平和に繋がると思っていた。でも、俺みたいな石ころの、ちっぽけな欲望を叶えたところで、世界に変化などおきはしないのだと思いつ改めた。

「よし、まずは田中敬一の指導を徹底すべきだな」

俺は策略をめぐるせ、田中敬一へメールを再び送った。

50・ふけさん

『明日、公園に集合しろ!』

川島君からのメールを見て、私は思わず頭を抱えた。

どうするや、おい。

カエデさんは店長殴るし、川島君は私を束縛しようとするし、8月31日は『暗黒豆腐少女』のデビューライブがあるっていうのにハルカとかいう女と会えて言うし、ってかそもそも8月31日にライブできるかどうかも怪しくなってきたし、カエデさん店長殴るし、喫茶『パ Nusantara』は何故か休業中で使えないし、カエデさん店長殴るし、市役所の仕事も忙しいし、カエデさん店長殴るし、カエデさん店長殴るし、喫茶『パ Nusantara』のマスターはまだ意識が戻らないし、カエデさん店長殴るし、賄賂をわたしたお客さんからゆすられるし、カエデさん店長殴るし、今週のジャンプ買ったら合併号で先週と同じものだったし、カエデさん店長殴るし……………。

「うばおおおああうう!」

私はついに発狂しそうになった。しかし、寸でのところで踏みとどまることが出来た。それは、たくさんある嫌なことを吹き飛ばしてしまえるような、とても良いことがあったからだ。人間、何か一つでも良いことがあれば、何とかやっていけるものさ。

私はそんなことを考えながら携帯をかまい、嫌なことから逃避した。

51・ハルカ

「いやー、ハルカちゃん撮影良かったよ！ ささ、次の収録があるから直ぐに準備してね」

「……はい」

ここ最近、かなり仕事が忙しくなってきた。疲れた。眠い。ああ、私はちゃんと歌えていただろうか？ ちゃんと踊っていただろうか？ 自分では120パーセントの力を出し切っているつもりだ。でも、実際はベストパフォーマンスには程遠いことは、自分が一番わかってる。こんな状態で、私はファンみなさんに『憩い』を届けられてるのだろうか？ 私は、このまま事務所の方針に従って、数だけこなすアイドルのままでもいいのだろうか？ 私は、間違っているのだろうか？ 誰か、教えてよ……。

忙しさの中に身をおいたことがある人なら誰でも思うことなのでしょう。私は自分の歩いてきた道が正しかったと信じることもできず、どんな未来を描けばいいかもわからず、盲目の日々を送っていた。

『大切なのは、君が言う努力を何でもない日常に変えることだよ』

ふと、社長さんの言葉が思い浮かんだ。今の私には、この忙しい日々を当たり前の日常に感じることはできない。嵐のど真ん中にいるときに「今日もいい天気だなあ」なんて言えないよ。

……もし、こんな閉塞的な日々が差すとしたら、私にとってその光源は社長さんだ。私にとって、社長さんは光だ。導きだ。ああ、はやく社長さんに会いたい。そして、話を聞いてもらいたい。いっぱい話を聞きたい。

「8月31日に社長さんに会えば、きっと私は変わる!」

私は妄信的にそう、確信していた。

「やあ、ハルカきゅん、おっつー!」

私が社長さんのことを考えていると、ふいに男の人に声をかけられた。

はて? どちら様でしょうか?

52・ハルカ

「やあ、ハルカきゅん、おっつー！」

この人を2、3度見たことがある。確かプロダクション『わっしよい』のお偉いさんだ。

「お疲れ様です。えっと……」

「ああ、俺のことは“マツツ”って呼んでよ！」

「はあ、マツツさん……お疲れ様です」

正直、なれなれしくて私の嫌なタイプの人だと思った。

「この前出した新曲、『初恋はナッツの味』聴いたよ。すごくよかったよん」

マツツさんは自然な動きで私の隣に座り、自然な動きで私の肩に手を回した。

「はあ、ありがとうございます」

私は相手がお偉いさんということもあり、肩にまわされた手を無下に解くことが出来なかった。

「ハルカちゃん、今何歳？」

肩に回された手がスリスリと私の柔肌を擦った。すごく気持ち悪

かったけど、我慢した。アイドルという仕事をがんばりたかったから、私は我慢した。

「16歳です」

「若いね」

今度は手を握られた。執拗じつように、ねちっこく、ニギニギされた。胸糞悪かった。でも、私は嫌な気持ちを一切顔に出さずに我慢した。我慢することも仕事だと思うから。アイドルという仕事は、嫌なことを我慢してでも、自分の気持ちに嘘をついてでも、しがみ付く価値のある仕事だと思うから。

「マツッーさん……そろそろハルカ次の収録があるので……」

マツッーさんのセクハラを見かねたマネージャーさんが、私に助け舟を出してくれた。

「あ？ おまえ俺のこと舐めてんの？」

急に、マツッーさんの口調がきつくなった。

「俺がハルカちゃんのスケジュール把握してないとも思ったのか？ ハルカちゃんの次の仕事まで、まだ1時間以上あるだろうがよ」

「そ、そうですが、いろいろと準備がありますので……」

マネージャーさんはたじろぎながらも、私のために今一度、マツッーさんに対して帰るように催促してくれた。

「ふん。まあいい。今日のところは帰るとしよう。それじゃ、ハルカちゃんまたね」

3日後、マネージャーさんが急に変わった。理由は教えてもらえなかった。

暗黒豆腐について調べた翌日、私は豆腐屋『白角』の店長に謝ろうと思ひ、店の近くまで来ていた。

どうやって謝ろう？ どんな言葉で謝ろう？ 私は昨晚からずっと考えていた。開口一番「すみませんでしたあ！」とアントニオ猪木のように叫びながら土下座する？ それとも、最初から涙を瞳に浮かべて、「ごめんなしゃ〜い」って幼女みたいに許しを請う？ もしくは、ミニスカートを履いて「うっふ〜ん。ごめんあそばせ」みたいな感じでお色気謝罪をする？

……という風にいろいろ考えた。でも、どれも私のこの謝罪の感情を表現するには力足らずで、うまくいかないと思ったから、これらの案は除外して他の謝りかたを考えた。

「はあー」

結局、私のこの感情をうまく伝える謝りかたなど思いつかなかった。私は「こうなったら出たとこ勝負だ！」と思ひ、ため息をつきながら豆腐店『白角』の前まで来た。

「よしー」

私はコブシに力を込め、意を決して『白角』の店内に入った。

「店長さん、ごめんなさいー！」

そして、素直に謝罪の言葉を口にし、直ぐに頭を下げた。これが、私に出来る最善の謝罪だと思った。

「……………」

頭を下げて数十秒、いまだに私の謝罪に対する返答はない。店長さんは沈黙したままだ。やはり店長さんは怒っているのだろうか？
「お前の言葉など聞きたくない、帰れ！」と言われるのではな
いかと思い、私は怖くて中々顔を上げることができなかつた。

「店長さんが、私としゃべりたくない気持ちはわかりますが……………」

私はあまりにも店長さんの沈黙が長いので、おそるおそる顔を上げた。

「あれ？ 店長さんは……………」

そこに、店長さんはいなかった。どうやら留守のようだった。

「はあー。なんだよお、気合入れて損した」

私は拍子抜けしてしまい、深くため息をついて緊張を解いた。

54・警察官川島

「遅いぞ！ 田中敬一」

予定よりも30分遅れて、田中敬一が公園にやってきた。

「ごめん川島くん」

「その“川島くん”って言うのやめる！ おまえにそう言われると気持ち悪いんだよ！」

「でも、私達は大学からの“友達”という設定なのだろう？」

「……そうだけど、それはハルカちゃんと一緒にいるときだけではないんだよ！ 俺と二人の時はその呼び方やめる」

「うむ。それもそうだな。私も気色悪いと思っていた。今日から“貴様”と呼ばせてもらおう」

「おまえ、自分の立場わかってんのか？ 豚箱に放り込むぞ、この豚野郎！」

「じゃあ、何と呼べば良いのだ？ ぜひ、レクチャーしていただきたいのだが？」

「俺のことは“川島さん”と呼べ。わかったな？」

「……川島よん」

「“よん”じゃない！ “さん”だあ！」

「川島いち、に、さん、だあ！」

「いいかげんにしろ！！ だまって俺の言つとおりにしる！ こんちくしょうー！！」

……とまあ、こんな不毛なやり取りを俺は田中敬一と30分ほど続けた。

「お？ すまん、川島殿。メールが来たので、少し黙っていてくれるかな？」

結局、俺の呼び方は“川島殿”で落ち着いた。多少はこちらも譲歩しないと、この男との会話に終わりが見えなかったから、しようがない。

55・ふけさん

『これから豆腐屋白角の店長に謝ろうと思うんだけど、何かアドバイスくれない？ 勢いで謝ろうと思っていたんだけど、間があいちやって、不安になってきたの』

私はカエデさんからのメールを見て、ほほえましい気持ちになった。あのカエデさんが素直に謝ろうと決意したことを、嬉しく思った。私は直ぐに返信しようとした。しかし、

「おい！ 田中敬一、これからおまえに俺とハルカちゃんの仲を取り持つてもらうための作戦を叩き込む」

川島殿はそれを許してくれなかった。

「川島殿、メールを返信してからじゃだめかね？」

「ダメだ」

「……わかった。それじゃ、手短に頼むよ」

川島殿の目は鋭く、怖かったので私は抵抗することをあきらめた。まったく、恋に溺れた男ほど、怖い生き物はない。自分より大切な何かを見つけ、それを手にするために自分を投げ捨てることの出来る人間ほど、恐ろしいものはない。

「うん、素直でよろしい。まず、ざっくり言うとな、お前の役目は“撒き餌さ”だ。残念なことだが、ハルカちゃんはお前に惚れて

いる。そんな状況で、無理に俺のことをアピールしても意味がない……」

川島殿は少しさびしそうな表情でうつむき、黙り込んだ。はやく話を切り上げたかった私は、この無駄な沈黙を破るように言葉を発した。

「要は、そのハルカとかいう女に私が嫌われるようにすれば良いのだろう？　そして、川島殿のことをアピールすれば良いのだろう？　それで問題ないだろう。私が恋のキューピットになってやるっ」

私の言葉を聞いた川島殿は顔を上げ、あきれた顔でため息をついた。その顔を見て、私は少しイラッとした。

「お前、俺の話聞いていた？　お前は“撒き餌さ”だって言うただろう？　いいか、ハルカちゃんがお前のことを嫌いになったら、俺はどうなる？　その風通しの良い頭で考えてみ？」

川島殿のこの発言には心底イラついた。しかし、私は低俗な人間のように、バカみたいに怒鳴り散らすことはせず、あくまでも冷静に対応した。

「用済みだな。だって、そのハルカとかいう女は私と会うために川島殿を利用しているだけなのだから。私という餌がなければ、君みたいな凡人に対して、アイドルが興味を示すわけがない」

私はこのとき、殴られる覚悟をしていた。というか、あえて川島殿が怒りに身を任せて私のことを殴りたくなるような言葉を吐いたのだ。怒りに身を任せて暴力を振るうことでしか、暴れる感情を制御できない低俗なヤツだと、見下してやろうと思ったのだ。そのた

めには、数発殴られる痛みくらい我慢してやろう。そう、思っていたのだ。

「そうだな。その通りだ。だからお前には“適度に”ハルカちゃんに興味を引き続けてもらいたい。ハルカちゃんが俺と連絡をとらなければいけない状況を常に作り出す、“撒き餌”になってもらいたい」

しかし、川島殿は冷静だった。その、あまりに冷静な川島殿の態度に、私は心底戸惑った。きっと川島殿は私の発言に対して怒り、衝動に身をまかせて私に殴りかかって来ると思っていた。だから私は思わずキョトンとしてしまい、言葉を失った。

「……田中敬一、お前はまだ、本気で恋をしたことがないのだろう？ お前に良いことを教えてやる」

川島殿はキョトンとした私の心中を察したのか、淡々と語りだした。

「恋を成就させるには必要なことが2つある。一つは常にしたたかであること。そして、もう一つは、熱い情熱を同時に持ち合わせていることだ！」

そう言うと、川島殿は思いっきり私の顔をぶん殴った。完全に油断していた私は、殴られた勢いそのまま地面にしりもちをついた。

「あわわわわ……」

私はあまりの衝撃に、「あわわわわ」と言うことしかできなかった。

56・カエデ

「何してんだあ、オメエ！」

私がおそろさんからのメールを待っていると、不意に後ろから声をかけられた。

「あ、あ、あわわわわ」

私がおそろのおそろ振り向くと、そこには店長さんがいた。店長さんの顔にはまだ、私が殴った後があり、薄っすら赤く腫れていた。

私はあまりに突然のことで、しかも店長さんの口調が怒っているようだったので、なんと言って良いのかわからず、「あわわわわ」と言うことしかできなかった。

「あれ？　なんでえ、カエデちゃんじゃないの？　泥棒かと思ったよ。何しに来たの？」

どうしよう！？　謝らないと　なんて言えはいいの？　そうだ、とりあえず頭を下げなくちゃ　いや、やっぱりここは土下座か？　私がそんなことを考えながらアタフタしていると、店長さんは目を丸くしながら私のことをマジマジと見た。

「その動き、デビュー曲のダンスかえ？　おもしろい動きだねえ。ささ、そんなところに突っ立ってないで、こっちにお座りよ。今お茶だすからね」

店長さんは私の顔を見て怒るところか、気さくに笑っていた。

「お、怒ってないんですか!?!」

私は鳩が豆鉄砲くらった様な顔で驚いた。怒っていない？ 何故？ 理不尽に殴られたのに、なんで怒っていないの!?!

「なんのこと?」

店長さんとはばけた顔で、お茶を入れていた。

「き、昨日、店長さんを、殴ってしまったこと……」

「ああ、昨日のこと？ いやー、人に殴られたのは久しぶりだったなあ」

店長さんは世間話をするようなテンションで「ガハハ」と笑っていた。

「ほれ、これ食ってみんしゃい」

そして、唐突に店長さんは私に黒い豆腐を差し出した。

「これは……」

昨日あれほど不味いと言った暗黒豆腐を今出してくるということは、これは私に対する嫌がらせだろうか？ にこやかな顔をしているけれど、やっぱり腹の中は私に対する憎悪でいっぱいなのだろうか？

「いただきます」

いろいろな考えが私の頭に錯綜したが、私はとりあえず差し出された黒い豆腐を食べることにした。

「モグモグ……あれ？ うそ！？」

私はまたもや驚いた。あんなに生臭かった暗黒豆腐の臭味が、キレイサツパリなくなっていたのだ。

「どうでえ？ 昨日カエデちゃんに『生臭い』って言われて、殴られただろ？ そのとき、思ったんだあ。周りの人の好意に甘えて、不味い豆腐を作り続けるのはダメだって。調理をしなくてもおいしく食べられる暗黒豆腐を作ろうってな。カエデちゃん、ありがとな」

急に、涙が出てきた。私のことを怒るところか、私に感謝をしてくれた店長さんの気持ちが嬉しくて、涙が止まらなかった。

「で、味はどうでえ？ 美味いかえ？ 昨日徹夜で作ったんだけどお……」

店長さんは味の感想が気になっているらしく、私の涙など気にも留めず聞いてきた。私は服の袖で涙と鼻水を拭い、答えた。

「生臭さはなくなりましたが、不味いです」

店長さんは頭を抱えて「あちゃー！」と言っていた。私はそんな店長さんのしぐさを見て、腹を抱えて笑った。ほんと、涙が溢れて止まらないほど、心の底から笑った。

57・ふけさん

「あわわわわ……」

川島殿は、相変わらず「あわわわわ」としか言えない私に歩み寄ってきた。正直怖かったが、今の私には「あわわわわ」と言いながら小刻みに震えることしかできなかった。

「いいか、田中敬一。恋を手に入れるためにはなあ、“決意”する必要があるんだ」

川島殿は私の目を睨みつけながら、恋のレクチャーの続きを話し始めた。私は「あわわわわ」と言いながらその話に耳を傾けた。

「他の人間を不幸にする決意をなあ！ お前は今、非常に不幸だろう？ 俺に殴られるわ、知らない女とデートするはめになるわ、散々だよな？ でもな、俺がこの恋を成就させるには、お前を利用する必要があるんだよ。わかるな？ お前の不幸の上に、俺の幸せが成り立つんだよ。だから、お前を不幸にしてやる！」

川島殿は非常に理不尽な理由で『私のことを不幸にしてやる宣言』をした。私はあまりの恐ろしさに、さらに小刻みに震えた。

「……………と昨日決意したんだけどなあ、やっぱり俺には無理だったよ」

急に、川島殿の雰囲気はやわらかくなった。先ほどまでの怒気は消え去り、非常に穏やかな顔をしている。

え！？ いったいどういうこと！？

あまりに急激な感情の変化についていけず、私は非常に困惑した。

「田中敬一、殴って悪かったな。やつぱり、他人の不幸の上に俺の幸福はない。今、あらためてわかったよ。お前のおかげだ、ありがとう」

そう言うつと、川島殿は深々と頭を下げた。

さっきまで怒っていたのに、俺のことを殴ったのに、今度は急に謝りだした……こいつ頭おかしいんじゃないか？ 情緒不安定すぎるだろう！ と思いながらも、私は相変わらず「あわわわわ」としか言えなかった。

「お前には、ほんとうに悪いことをしたと思っている。もう、お前を束縛するつもりはない。ただ、最後に一つだけ俺の願いを聞いてくれないか？」

川島殿はそう言うつと、今度は土下座をし始めた。

おいおい、今度は何だよ！？ 勘弁してくれよ！ 私はそう思いながら「あわわわわ」とうなっていた。

「ハルカちゃんとデートしてやってくれ！ 頼む。お前がハルカちゃんのことも思っていないのならそれでもいい。ただ、ハルカちゃんを楽しませてやって欲しい。ハルカちゃんを傷つけないでやって欲しい。これは俺のわがままだ。ハルカちゃんが望むことでもなんでもない、ただの俺のエゴだ。お前にとって何のメリットも

ないことはわかっている。でも、そこを何とか、頼む！ お願いだ！ 一日だけでいいから、ハルカちゃんの『社長さんに会いたい』という願いを叶えてやってくれ！！」

川島殿の土下座には、言葉では表せない気迫がこもっていた。私はその気迫に押され、思わず「わ、わかった」と頷いてしまった。

「ほ、ほんとうか！？ ありがとう、ありがとう……」

川島殿は、何度も何度も「ありがとう」と言いながら泣いていた。

……つたく、泣きたいのはこっちだっつーの！ こっちはお前に殴られてんだぞ！ こんちくしょう！！

私はそんな風の中で悪態をつきながらも、この川島という男は悪いやつではないと思った。自分のことだけを考えて恋すればいいのに、周りのことまで考えて恋をしようとする、このバカな男のことを、私は嫌いではない。

この日、私と川島くんの間には奇妙な友情が生まれた。

58・ハルカ

『8月31日、社長さんと会えるよ。良かったね』

川島さんから届いたこのメールを読んで、私は嬉しさのあまり飛び跳ねた。

やばい！ 嬉しい！ 心臓がバクバク鳴っている！

今日もダンスレッスンにテレビ収録と忙しかったけど、一気に疲れが吹き飛んだ気がする。ああ、8月31日が待ち遠しい。残り10日かあ、はやく来ないかなあ。

「ルンルンルン」

私は鼻歌を歌いながら、カレンダーの8月31の空欄にハートマークを書いた。そして、いろいろと妄想した。会つてすぐに何て言おうかな？ 社長さんはどんな話に興味があるんだろう？ どんな服着ていこうかな？ 社長さんはどんな服が好みなんだろう？ お昼は何を食べようかな？ 社長さん何が好きなんだろう？……

次々と浮かんでくる疑問があまりにも多くて、私はこのままじゃまずいと思った。

「……やっぱり、川島さんから社長さんの細かい情報を聞いておくべきね」

そう思った私は感謝の言葉を添えて、川島さんにメールを送った。

俺は家で一人、いろいろと考えていた。

今日、俺が殴った後、田中敬一が絶望したような顔で「あわわわわ」と言っている姿を見て思った。

“俺は一人の人間を「あわわわわ」としか言えない様な状況に追い込んでまで、恋がしたいのか？”

答えはNOだった。だから俺は、ハルカちゃんのことをあきらめようと思った。でも、やっぱりあきらめたくないという気持ちもあって、心の葛藤に決着をつけることができずにいた。

「よし、決めた。おれはやっぱり……」

しかし、夜もふけてきた頃、ようやく俺は心の葛藤に決着をつけることができそうになった。

そんなとき、ハルカちゃんからメールの返信が来た。

『川島さん、ありがとうございます。お礼と言ってはなんですが、明日、ランチと一緒にしませんか？ 仕事の合間なので、あまり長居はできませんが、どうでしょうか？』

ハルカちゃんからのこのメールは、嬉しくもあり、悲しくもあり、俺はとても複雑な気持ちになった。

今さつき、ハルカちゃんのことをあきらめようと決めたのに。強がるのはやめて、恋に臆病でヘタレな自分のままで生きて行こうと思っただのに。自分のことだけを考えて生きるのをやめて、周りの人のことを一生懸命考えて生きようと決意したのに……。

ハルカちゃんの何気ないメールは、俺が必死に考えて考えて考え抜いた決意を、簡単にゆらしてしまふ。まるでジェンガで遊ぶように、グラグラと。その行為に悪意など一切存在しない。でも、それが一番怖くて一番辛い。それが一番、人を傷つけることもある。そんなことを思いながら、俺は頭を抱えて必死に考えた。

”俺はどうしたらいいのだろうか？”

”ハルカちゃんのこととはあきらめると決意した矢先、ハルカちゃんに会ってどうする？”

”ここは会わないべきだろう”

”でも、会いたい”

”利用されるだけでもいい。それでもいいから、会いたい”

”でも、俺のこの望みの果てには、他人の不幸がきつと存在する……”

俺はグラグラとゆれる弱い意志と必死に戦った。どう行動するべきか必死に考えた。自分のこと、ハルカちゃんのことを考えた。さらに、田中敬一のこと、俺の両親のこと、ハルカちゃんの両親のこと

と、ハルカちゃんのファンのこと、ハルカちゃんのマナージャーのこと、ハルカちゃんの仕事のこと、俺の仕事のこと、世界紛争のこと、世界平和のこと……とにかくいろんなことを考えた。

本当は、恋というものは自分のことだけ考えてするものなのだろう。それなのに俺は、自分のことだけを考えることはできなかつた。終いには、世界のことまで考えて恋しようとしていた。こんな俺に、やっぱり恋は無理なのだろうか？

俺はいろいろと悩んだ挙句、メールを返信した。

『“謝罪”は“告白”と同じです。

過去の状況に戻し、何事もなかったことにしようという、後ろめたい行為ではありません。自分の望む未来を掴むための、勇氣ある行為です。変化を恐れず、好きな人に告白する様な気持ちで、謝罪してみてください。では、健闘を祈ります』

豆腐屋『白角』の店長さんとの関係も良くなり、楽しく店長さんと雑談しているときに、ふけさんからメールが届いた。その内容は、謝罪に関する私へのアドバイスだった。

……遅いよ！ もう謝罪し終わったっつーの！

私はタイミングの悪いふけさんに対して、怒りと感謝を込めてメールの返信をした。

「さてと、私そろそろ帰りますね」

そして、帰り支度をした。

「もう帰るのかえ？」

店長さんは名残惜しそうな顔をしていた。

「すみません。私、なんだか今とても良い”気持ち”なんです。この”気持ち”を文字にすれば、きっといい歌詞が書けると思うんです。だから、この”気持ち”が冷めないうちに、家に帰って歌詞を

書きたいと思います」

「そうかえ、良い歌詞が書けるとええね。それじゃ、お土産に『暗黒豆腐』を持っていきなさい」

「けっこうです」

私は冷徹な態度でお土産を断り、直ぐに豆腐屋『白角』から出た。

「デビューライブ、楽しみにしてるでね」

店長さんは悲しい目で私のこと見送ってくれた。

家について直ぐ、私は机に向かい、歌詞を書いた。ここ数日間で私が学んだこと、気付いたこと、思ったこと、失敗したこと、すべてを込めよう。

私はそう思いながら、時が経つのも忘れるほど集中した。

61. ふけさん

『アドバイス遅せーよ！ このタコスケが！ もう店長さんに謝ったちゅーの。でもまあ、ありがと。一応感謝はしています。店長さん、『暗黒豆腐少女』のスポンサー続けるって言ってくれたよ。だから、8月31日のデビューライブ、がんばろうね。あと、歌詞はまかせて。絶対いい歌詞書いてみせるから』

私ที่บ้านに着いた頃、カエデさんからメールが届いた。どうやら、ちゃんと謝罪できたようで、よかった。

私はそう思いながらも、罪悪感でいっぱいだった。8月31日はハルカという女とデートをしなければいけない。川島君と約束してしまったのだ。だから、カエデさんのデビューライブには、いけないんだ……ごめん。

私は心の中で何度もカエデさんに謝罪した。

「プルルルル プルルルル」

突如、携帯電話が鳴ったので、私は画面を確認した。画面に映し出された名前を見て、私は思わずにやけてしまった。

「もしもし！ はい、はい……明日……ランチ？ おいしいイタリアン？ もちろんOKです！ 楽しみにしています」

そして、少し高いテンションで電話越しの会話を楽しんだ。

62・カエデ

【タイトル：地獄の愛は煮えたぎる

私の心は真つ暗で　まるで暗黒豆腐の様
あなたのせいよ　わかっているの？
もういいわ　死んで頂戴　地獄へ落ちろ

go to hell go to hell
地獄の業火で豆腐を茹でろ

go to hell go to hell
おいしい湯豆腐召し上がれ

マグマの池で頭を冷やしたら　地獄の花を摘んできて
それで許してあげるから　必死になればできるでしょ？

go to hell go to hell
もつと必死に愛しなさい

go to hell go to hell
軽い愛は欲しくないの

地獄より熱い愛で　私を抱きしめて
あなたの腕の中　溶けてしまいたい
それだけが望み　それだけでいい
だから　私を愛しなさい

go to hell go to hell
地獄の業火で豆腐を茹でろ

go to hell go to hell
おいしい湯豆腐召し上げれ

私の心は真っ暗で まるで暗黒豆腐の様
それを照らせるのは あなただけ

それだけは わかっていてね チュ！（投げキッス）】

私は感情の赴くままに、この歌詞を完成させた。

……おかしい、私がここ数日間で学んだことや感じたことを表現しようと思ったのに、なんかよくわからんヘンテコリンな歌詞が出来てしまった……。

「やっぱり、“気持ち”というものを文章で表現するのは難しいや。せつかく、この気持ちを伝えることができれば、人の心打つことができると思ったのに。人々を魅了することができると思ったのに……うまく文章にできないや」

私はそんな独り言を呟いた。

それもそうだ、たかが数日でスバラシイ歌詞を書けるようになるのであれば、だれでもプロになれる。正解がわかってても、それを表現できる技術がなければ意味がない。やっぱり、私にこの曲にあう歌詞を書くのは無理だ。

私はそう思った。そして、いつもならここであきらめていたと思う。けれど、今の私は前とは違う。

「……でも、私はアイドルだ。足りない分は歌やダンスで表現すれ

ばいい」

もし仮に、文字だけで全てを表現できるなら小説家になればいい。でも、私が目指すのはアイドルだ。アイドルは歌詞だけじゃなくて、歌声やダンスでいろんなことを表現する職業だ。だから私はもう、スバラシイ歌詞が書けないことを嘆くのはやめる！ 歌詞だけじゃ足りない分を、歌とダンスでおぎなってみせる！

それが、プロのアイドルだと思うから。創り手が表現できない部分を代わりに表現する。それがアイドルという仕事なんだ。

「ぐるぐる……」

突如、腹がなった。あまりに集中していたため、夕飯を食べ損ねていたことに、今気がついた。

「歌とダンスの練習がんばろう」

私はそう思いながら、腹いっぱい飯を食った。

63・ふけさん

川島君に殴られた日の翌朝、私はカエデさんに呼び出された。本来なら喫茶『パンヌス』に集合するのだが、今はマスターが意識不明で開店していないので、近くのアミリーレストラン『でべそ』を使用した。

「ごめん、ちつと遅れた」

午前9時ごろ、私よりも数分遅れてファミレス『でべそ』にやってきたカエデさんは、席について直ぐ、「歌詞できた」とそっけない態度で言いながら、一枚の紙切れを渡してきた。

私はその紙切れに書かれた歌詞を読み、沈黙した。

「……………」

正直、なんと感想を言えばいいかわからなかった。

この歌詞は、良いのか？ それとも悪いのか？ 全くわからなかった。『暗黒豆腐少女』の雰囲気は出ていると思うけど、この歌詞は少しぶっ飛びすぎじゃないか？ いや、でもこれくらいぶっ飛んでいるほうが、案外受け入れられるのだろうか？

「……………」どう？ 一生懸命考えて書いたんだけど。ちゃんと『暗黒豆腐』も歌詞の中に入れたし……………ダメかな？」

カエデさんは非常に自信なさそうな顔で、私に感想を求めてきた。

「うーんと……………えっと……………そうだねえ……………」

私は上下左右に目玉を激しく泳がせた。きっと、この速度で泳げば、水泳自由形の世界記録が出るだろう。そう思えるほどすばやく、私の目はキョロキョロと動いた。

正直、下手なことを言つてカエデさんを傷つけたくなかつた。しかし、テキトウなことを言えば直ぐに嘘だと見破られてしまう。ああ、なんと言えがいいのだろうか。わからない……。

私がそんなことをごちゃごちゃ考えていると、カエデさんは強い口調で、静かに語り始めた。

「……わかつてる。ダメなのは、わかつてるんだ。でも、大丈夫。私、足りない分は、歌とダンスでおぎなうから。歌詞で観客を魅了できないなら、歌とダンスで魅了すればいい。ふけさんも、そう思うでしょ？」

彼女の黒くて強い目に、思わず吸い込まれた。私の目は泳ぐのを止め、漆黒の瞳に向かつて、静かに溺れた。

私が川島くんとくだらないやり取りをしている間に、女に現まを抜かしている間に、喫茶『パンヌス』のマスターの首を絞めている間に、カエデさんはアイドルとして成長していたのだ。

一人の少女の成長を、こんなに間近で感じられたことに、私は純粹に感動した。それと同時に、成長の瞬間にそばにいられなかったことを後悔した。“瞬間”を見逃したこと……すぐく残念に思った。

「わかつた。この歌詞で行こう」

やっぱり、私の目に狂いはなかつた。彼女は真のアイドルだ。絶対に、彼女をプロデュースしてみせる。

この日、私は改めてそう思った。

64・ハルカ（前書き）

各話のタイトルの人物がその話の主人公となります。話ごとに主人公がかわりますので、少し読みにくいかも知れませんが、ご了承ください。

64・ハルカ

「ハルカさん、おはようございます」

私の新しいマネージャーは、とてもスタイルが良くて、とてもキレイな人だった。

名前は高橋未実^{たかはし みみ}、私は“未実^{みみ}さん”と呼んでいる。未実さんは控えめな性格で、品のある人だった。でも、声に覇気がなくて、弱々しかった。しかも、笑顔がへたくそで、まるで顔面麻痺のようだった。

「未実さん、そんなに引きつった顔で笑わないでください。怖いです」

「ああ………すみません。私昔から、笑顔がへたくそで………」

そう言うと、未実さんはうつむいてしまった。こんなにキレイなのに、こんなに根暗だなんて、もったいない人だなあ。

「それで、今日のスケジュールはどうなっていますか？」

「あ、はい！ ちょ、ちょっと待ってくださいね」

そう言うと、未実さんは手帳を開くことなく、直ぐにスケジュールを教えてくれた。全て暗記していたのだろうか？

「………わかりました。ありがとうございます。ところで、今日のお

昼に、お友達とランチをしたいのですが、現場を抜けても大丈夫ですか？」

「あ、はい。大丈夫ですよ。今日のスケジュールでしたら、2時間ほどであれば問題ありません」

「それでは、お昼2時間ほど抜けますので、よろしく願いしますね」

「あ、はい。あの、実は私も、今日のお昼……」

「すみませーん。マネージャーさんいますか？」

突如、未実さんのか細い声を掻き消すように、若いディレクターの人がやってきた。

「ちょっと来てもらえますか？」

そして、「ああ、ああ」とうなっている未実さんの腕をつかみ、乱暴に連れて行った。

「ふうー……未実さん大丈夫かな？」

一息ついた私は次の撮影が始まるまで休もうと思い、ソファアに座った。

「ん？ これは？」

ソファアの前にある机に、一冊の雑誌が置いてあった。その雑誌には『夏のグルメ大特集！』と書かれていた。この部屋には私と未

実さん以外いなかったから、未実さんが置いていったのかな？

「わぁ！ おいしそう！」

私は暇つぶしがてらにその雑誌を読んだ。

「お！ このイタリアンのお店おいしそうだなあ。よし、今日の川島さんとのランチはここにしようかな」

私はこのとき、このページの端っこが折られていることに、気付かなかった。

「ふけさん、このあと暇？ レッスン手伝って欲しいんだけど」

私達は歌詞の話を終えてから、衣装のことやデビューライブ当日のスケジュールについて話をした。その話の後、午後からダンスのレッスンをしようと思っていたので、ふけさんにも手伝ってもらおうと思ひ、何の気なしに誘った。

「えっ！！……ちょ、ちょっと午後は仕事があ、あうっ！ あ、あるんだ………」

ん？ 何で最初に「えっ！！」って言った？ なんで、そんなにしどろもどろなの？ 何で途中「あうっ！！」って舌を噛んだの？ ……怪しい。こいつ、何か隠しているな。

直感でそう思った私は、カマをかけてみた。

「このあと、誰とデートするの？」

「ほへえ！？」

ふけさんの目が、ものすごいスピードで泳ぎだした。ビンゴだ！ こいつ、仕事じゃねーな。このあと誰かとあうんだ。

「……どんな人？ 美人？」

「は、はははは……は？ し、仕事だって、言っただろう？ そんな

な、で、デートなんて……ははは……はは？」

しかも相手は女だ！……こんちくしょう、私がダンスや歌のレッスンをしている間に、デートするつもりだったのか！もしかしたら、今まで仕事があるから忙しいって言っていたのも嘘だったのか！？……許せん。この男、許せん！

「そ、それじゃ。私はもう帰るから。レッスンがんばってえ〜」

そう言つと、ふけさんは直ぐに『ファミリーレストラン』でベそから逃げ出した。

「あ、ちょ、ちょっと……嘘つくなあ……！」

私はこのとき、心底イラついた。ふけさんが仕事サボってデートすることに對してじゃない。ましてや、私に嘘をついたことに對してでもない。

私がイラついたのは、私以外にふけさんのことを魅了する人がいたということだ。それは、私がふけさんを魅了できなかったということ。

他の誰も目に入らないほど、人を魅了できなければ、アイドルとしては力不足。その現実を突きつけられた気がして、心底イラついた。

65・カエデ（後書き）

久しぶりの更新になりました、申しわけありません。

書いているうちに最初に想像していた結末と変わりそうなので、少し更新スピードが落ちるかもしれません。
ご了承ください。

66・警察官川島

「はあー……」

俺はため息をつきながら、ハルカちゃんに指定されたイタリアンの店『天使のお零れ』へと向かっていた。

ハルカちゃんのこととはあきらめると決めたのに、結局、ハルカちゃんのランチの誘いを断ることができなかった……。

「えーっと……この店かな？ うーん、結構高そうだけど、大丈夫かな？」

イタリアン『天使のお零れ』について直ぐ、俺は予算が心配になり財布の中身を確認した。財布の中には諭吉さんがいたので、俺は少し安心した。

「さてと、ハルカちゃんはまだかな？」

俺は店内を確認したが、ハルカちゃんの姿はなかった。どうやら先に来てしまったようだ。さて、どうしようか。店の中で待とうか、それとも外で待っていようか……。

俺はそんなことを考えながら、ふと前を見た。すると、そこには一人の少女がいた。少女は草陰に隠れて、じつと何かを観察しているようだった。

何だあの子は？ 何で隠れているんだ？ 探偵か？

不思議に思ったので、俺は少女の目線の先を追ってみた。

「あ！ お、お前、なんでここにいるんだよ！」

そこには、何故か田中敬一がいた。

「お！ やあ、川島くん。奇遇だね、こんなところで」

田中敬一の進行方向の先には、イタリアン『天使のお零れ』……。俺はなんだか嫌な予感がした。

「お前、もしかして、このイタリアン『天使のお零れ』で食事するつもりじゃないだろうな？」

「へ？ そうだけど。それが何か？ ……ふふふ。聞いて驚くなよ、実は今日、デートなんだよ」

デート！？ まずいぞ、これからハルカちゃんがここに来るのに、田中敬一と他の女のデートシーンをハルカちゃんが見てしまったら……。

俺は最悪の事態を想像し、血の気が引いた。

「お前、と、とりあえず、えっと……だなあ……うーん」

俺はどうしていいのかわからず、焦った。とりあえず、田中敬一には店を変えてもらうか？ それとも時間をずらしてもらうとか？ いや、まずハルカちゃんにメールをしてだな……。

俺がいろんなことをゴチャゴチャ考えているうちに、時間はどんどん過ぎていく。

まずい、もうハルカちゃんが来る時間だ。

そう思った俺は前方を確認した。すると、遠くのほうにハルカちゃんの姿があった。

「おい！ 田中敬一！ 事情は後で話すから、とりあえずついてこい！！！」

俺はハルカちゃんに見つかる前に、田中敬一の手を取って、イタリアン『天使のお零れ』^{こぼ}から逃げ出した。

67・カエデ

「うそ……………」

私はショックを隠しきれなかった。

ファミリーレストラン『でべそ』からふけさんが逃げ出した後、私はふけさんの後をつけていた。デートの相手がどんな女か見てやるうと思っただのだ。しかし、ふけさんのデートの相手は女性ではなく、男だった。

「ふけさんって……………ホモ!？」

私は草陰に隠れながら、ふけさんが謎の男と楽しく談笑し、手と手を取り合って走り去っていく場面を目撃した。これはもう、確定的な証拠だろう。

あいつは、ホモだ!

でも、さてよ……………。ということは、私はあの“男”に負けたという事か!？ 私の魅力は、あの“男”以下ということかあ!!

美人な大人の女性に負けたのならまだ、納得できたかもしれない。私はどちらかといえばかわいい系だし、まだ若いから大人の魅力もないし。でも、ふけさんを魅了した相手が男だ何て、許せない。私が男以下なわけがない!!

私はさらにイライラした。このイライラ、どうしてくれようか。

そんなことを考えていたとき、私の目に一人の女が映った。

「あ！ カシユーナッツ！！！」

私はイライラを忘れて、思わず叫んでしまった。私の目線の先には、アイドル『カシユーナッツ』のハルカがいたのだ。

「あ……あなた、もしかして、栗山カエデさん？」

「う、ええ！？ な、なんで私の名前知っているの？」

私は心底驚いた。なんで、今話題の新人アイドル様が、まだアイドルとしてデビューもしていない私の名前を知っているの？

「そうだ、カエデさんだ！ 私、あなたにすごく感謝していたの。本当にありがとう。あなたのおかげで、私はアイドルになれたの」

「は、はあ……」

しかも、何故か感謝されているし……。こっちはあなたにオーディションで負けて、ライバル視していたのに……なんか拍子抜けしちゃったじゃない。

「あら？ カエデさん、ちょっとごめんなさい。電話だ」

そう言うと、ハルカは電話に出た。

「……はい。はい、急用ですか……。変態？ はあ……そうですか。それじゃあ、ランチはまた今度ですね。いえいえ、こちらは大丈夫ですから。そんなに謝らないください。ええ、それじゃあ、失礼

しますね」

電話を終えたハルカが、急に私の顔を見つめてきた。

「な、なによ」

悔しいけど、その顔はとてもかわいくて、やっぱりこの子はアイドルとしての才能があるなあ、と思ってしまった。

「もし良かったら、ランチと一緒にしません？」

68・ふけさん

「おい！ 痛い！ いい加減手を離せ！！」

私は川島君の手を振り解き、怒りをあらわにした。

「いったいどういっつもりなんだ！？ そんなに私のデートが気に食わないのか！」

「はあ、はあ、はあ……すまんすまん。ちょっと、今から電話するから、もうちょっと待ってくれ」

そう言つと、川島君は私のことを無視して電話をかけた。

「ムキー！ 私を無視するなあ！！」

「あ、ハルカさんですか。すいません、実は急用ができて……はい、実は変態が町で暴れていまして……」

「おい！ 変態って私のことかあ！！ 訂正しろ！ て・い・せ・い・し・ろー！！」

「……はい、すいません。また、今度お願いします。すいません、すいません、すいません……」

川島君は電話越しに何回も土下座して謝っていた。川島君、君のその美しい土下座姿は、電話の向こうの人には見えていないのだよ。

「さあ、そろそろ事情を説明してくれてもいいんじゃないかい？
君は私のデートを潰してしまったのだよ。もし、くだらない理由だ
つたら、怒るよ」

「……ああ、悪かったな。実は……」

川島君は、地面にこすり付けて赤くなった額をさすりながら、つ
らつらと事情を話し始めた。

69・ハルカ

「おいしいですね」

「……………モグモグ」

「ここのお店、結構有名みたいですよ。『天使のお零れ』^{おこぼ}って、なんだか変な名前ですよね」

「……………モグモグ」

カエデさんは、ずっと無言でこの店一番人気の『天使の涎^{よだれ}パスタ』を食べていた。気のせいだろうか？　ずっと私のことを睨^{にら}んでいる気がするのだけれど……………。

「カエデさんは、何でアイドル『カシユーナッツ』のオーディション、受けたのですか？　他にもいっぱいアイドルのオーディションあるじゃないですか……………」

私は話題がなかったのので、テキストウに思いついたことを口にした。すると、カエデさんは急に食べるのをやめて、先ほどよりもさらに鋭い目で私のことを睨^{にら}んできた。しかも、その目からは怒りが感じられたので、私は「何かまずいこと言ってしまったのかしら？」と不安に思った。

「あんたはいいわよね。合格して、今話題のアイドルとして輝いているんだから。私はね、アイドルになるのが夢なの。小さいときからずっと、ずっと、ずっと……！　アイドルに憧れていたの。アィド

ルになることが私の全てだったの！……だから片っ端からアイドルオーディションを受けていたのよ。『カシューナッツ』のオーディションもその一つ。ご覧の通り、すべて落ちていきますけど？ あんたみたいに、合格できませんでしたけど？ 悪い？」

私はどうやらカエデさんの逆鱗に触れてしまったらしく、カエデさんは非常に興奮しながら言葉を発していた。

「ああ……す、すみません………軽率な質問をしてしまって……」

私は必死にカエデさんをなだめようとした。しかし、カエデさんの熱は一向に冷める気配がなく、私は困ってしまった。

どっしり……。

「あれ？ ハルカさんもこのお店でランチだったんですか？」

私が困り果てていると、突然マネージャーの未実さんに話しかけられた。何で未実さんがこの店にいるのかわからないけど、助かった。ここは未実さんに助けてもらおう。

そう思った私が、未実さんに事情を話そうとしたそのとき、カエデさんが急に叫びだした。

「ああ……！！！！ あ、あ、あ、う、占いアイドル『クリスタル』の『ミニ』さんだあああああ……！！ わ、私大ファンなんです……！！！！」

そして、私のマネージャーである未実さんに、抱きついた。

「……というわけで、ハルカちゃんにお前のデートを見せるわけにはいかないんだ。悪いけど、場所を変えてくれないか？」

俺は素直に事情を話し、田中敬一に頭を下げた。

「うむ……了解した」

田中敬一は俺の心情を察してくれたのか、素直に了承してくれた。

「よかった……。お前にはいつも迷惑かけて悪いな。ほんと感謝してるよ。ところで、デートの相手はどんな人なんだ？」

俺が興味本意で聞くと、田中敬一はまんざらでもない顔で話し始めた。

「実は、私がアイドルプロダクション『わっしょい』で川島君に捕まった日に、出会った人でね。私がうっかり落とした携帯を届けてくれて、そこから何回か食事に行くようになったのだよ」

嬉しそうに女の話をする田中敬一を見ると、少しイラッとする自分がいた。俺の恋は前途多難だというのに、何故この老け顔のおっさんがモテるのか皆目検討がつかない。

「未実さんという人なんだが、もとアイドルで、色白美人で、スタイル良くて、やさしくて……」

しかも、相手はもとアイドルの美人だとうじゃないか。ハルカちゃんといい、この男はアイドルにモテる顔なのか？

俺はその後モイライラしながら、田中敬一のノロケ話を聞いた。

71・カエデ

「ミミしゅ〜あん！ ミミしゅ〜あんあん！ 大好きですう〜！
本人に会えるなんて、夢見たいですう〜！！」

私は先ほどまでの怒りを忘れて、ミミさんに抱きついた。においをかいだ。ほおずりした。私が憧れていたアイドルに会えるなんて……これ、夢じゃないんだよね！？ ああ、幸せ〜！

「ちょ、ちよつと……私もう、引退していますので、勘弁してください〜！ ハルカさん、助けて〜！！」

「良く事情はわかりませんが、とりあえずカエデさん、落ち着いてください。ちゃんと紹介しますから、とりあえず未実さんから離れてください」

ハルカが私とミミさんの間に割って入り、私達は織姫おりひめと彦星ひこぼしのように引き離された。この三流アイドルめ！ 邪魔すんじゃないわよ！ 天の川気取りか！ そのまま流されて、アイドル界から消えてしまえ！！

「あんだ！！ ミミさんと知り合いなの！？」

私は、ハルカのミミさんに対する態度が先ほどからあまりにフラックで、気に入くわなかった。ミミさんはなあ、お前みたいな三流アイドルが気安く声をかけていいお方じゃないんだよ！！

私はそう思いながら、かなり威圧的な態度で言葉を発した。

「未実さんは、私のマネージャーです」

「はあ！？ マネージャー？ 意味わからないんだけど。ミミさんはねえ、スーパーアイドルだったのよ。マネージャーなんかするわけないじゃない！！ ねえ、そうでしょ？ ミミさん！」

私は、ミミさんがハルカのマネージャーなんかするわけがないと心の底から思った。

「わ、私は、ハルカさんの、マネージャーです……」

だから、ミミさんのこの言葉は真実ではないと思った。ミミさんのことだから、きつとご謙遜なさっているのだろうと思った。

「……………わかった！ ミミさんは、先生なんですね？ ミミさんは、あえてマネージャーという立場にその身を置き、この三流アイドルにいろいろ教えてあげているんですね！！ さすがミミさんです！！ こんな三流アイドルに……」

「ハルカさんは三流アイドルではありません！！」

突如、未実さんが店内に響くほどの大きな声をあげた。

「え……………え……………あえ……………」

私は何が起きたのかわからず、呆然とした。

「ハルカさんは、とてもがんばっています。とても素敵な、一流アイドルです。どこのどなたか存じませんが、あなたにハルカさんを否定する権利はありません！」

憧れの人からの言葉というのは、どんなに些末なことでも心に響く。そこら辺の小僧に真理の極みを説かれるよりも、憧れの人に言われる普通の言葉の方が身に沁しみる。

だから、ミミさんの次の言葉に、私の心は酷く揺さぶられた。

「アイドルになったことがない人に、アイドルの苦勞はわかりません。そして、その苦勞を知ろうともしないで、三流だ四流だと言っているあなたに、アイドルを語る資格はありません！」

ミミさんが言った何の変哲へんてつもない言葉に、私の全てが否定された気がした。

“アイドルを語ることですらできない私は、アイドルになれない”

そう思うと、苦しくなった。夢をあきらめる恐怖が、体中を襲った。今まで誰になんと言われようと、揺るぐことのなかった『アイドルになる』という夢が、今初めてぐらついた。

「あ、ああ、ああ……」

だから私は、この場から逃げ出すことしか、できなかった。

72・ふけさん(前書き)

各話のタイトルの人物がその話の主人公となります。話ごとに主人公がかわりますので、少し読みにくいかも知れませんが、ご了承ください。

72. ふけさん

カエデさんが消えてから、もう7日経っていた。

「カエデさん……いつたいどこへ………」

レストラン『でべそ』でカエデさんと歌詞の話をした日以来、急に連絡が取れなくなった。初めは特に気にもとめなかったが、さすがに4、5日目には心配になり、川島くんに相談した。

川島くんは「できる限りのことはする」と言ってくれた。しかし、今だカエデさんが見つかったという連絡はない。

私なりにカエデさんを捜索しようと思ったが、私はカエデさんの住所も知らなければ、いそうな場所も皆目検討がつかなかった。私は、カエデさんについて何も知らない……。それを、あらためて思い知らされた。

「カエデさんはいったいどういづつもりなんだ！ 『暗黒豆腐少女』デビューライブまであと3日しかないのに」

カエデさんのことをもつと知ろうとしなかった過去の自分に対する苛立ちもあいまって、私の心は、怒りにも似たイライラとした気持ちでいっぱいだった。

「もう、機材も手配した。衣裳も準備した。いろんな人にも宣伝した。それなのに、肝心の『暗黒豆腐少女』がいなければ意味がない。全てが水の泡だ！」

「プルルルル！ プルルルル！」

「はい！ もしもし！」

突如、携帯が鳴ったので、私は反射的に電話に出た。私は電話の相手がかエデさんであることを期待した。しかし、携帯から聞こえたのは男の声だった。

「もしもし？ わたくしアイドル研究家の“舞茸まいたけひろし”というものです……」

「ええ！？ ま、舞茸さんですか？」

電話の相手はアイドル業界でその名を知らない人はいないといわれる超有名人、アイドル研究家の“舞茸まいたけひろし（芸名）”さんだった。

「えつと、『暗黒豆腐少女』について、少し聞きたいのですが……あなた、『暗黒豆腐少女』のマネージャーさんですよ？」

さすがアイドル研究家。まだデビューもしていないご当地アイドル『暗黒豆腐少女』の情報をすでにゲットして、マネージャーである私の電話番号まで入手しているなんて……すごい情報網だ。

私はアイドル研究家である舞茸さんの実力に驚愕した。

「は、はい！ 何でも聞いてください。『暗黒豆腐少女』は最高のアイドルなんです！ きつと、舞茸さんも気に入ると思います！」

これはチャンスだ。舞茸さんが推すアイドルは必ず売れるという

ジnkクスがあるほど、舞茸さんの発言はアイドル業界において影響
力がある。

「……とりあえず、私は舞台上のパフォーマンスを見て、アイドル
の魅力を判断します。ですので、デビューライブが3日後にあると
伺ったのですが、詳細を教えてくださいませんか？」

「は、はい!」

私は終始、頭を下げながら携帯電話越しに、舞茸さんとの会話を
続けた。

73・警察官川島

「ハルカちゃん、まだかな」

俺はイタリアン『天使のお零れ』で一人、ハルカちゃんが来るのをソワソワしながら待っていた。

一週間前に予定していたランチの約束が田中敬一のせいで流れてしまったので、今日はその“埋め合わせ”という名目でハルカちゃんから再びランチに誘われたのだ。

「あ、ハルカさん！ こっちです、こっち！」

数分後、ハルカちゃんがイタリアン『天使のお零れ』にやってきたので、俺は大きく手を振ってハルカちゃんを呼んだ。

自分では昂ぶる感情を抑えていたつもりだが、はたから見たら、ただ嬉しくて無邪気にはしゃぐ子供のように思ったと思う。好きな人に会える嬉しさを隠すなんて、俺には無理だから、しょうがない。

「川島さん、こんにちは」

笑顔で俺にあいさつをしながら、ハルカちゃんは向かいの席に座った。

「ハルカさん、この前は本当にすいませんでした!!」

そして俺は、ハルカちゃんが着座するのと同時に、全力で頭を下
げた。

74・ハルカ

「ハルカさん、この前は本当にすいませんでした!!」

私が席に着いた瞬間、川島さんはすごい勢いで謝ってきた。

「本当にすいません。わざわざ忙しい仕事の合間に、ランチに誘っていただいたのに……。しかも、ランチの直前に断りの連絡をしまい、ほんとうにごめんなさい。ほんとうならもつとはやくに連絡をするべきだったのですが、ほんとに急な用ができてしまったので……」

「いえいえ、私は気にしていませんので、頭をあげてください。急用では、仕方ありません」

「でも……」

前回のランチを急用で断ったことに罪悪感を持っているらしく、川島さんは私が高だめても、中々顔を上げてくれなかった。

「ほら、いいかげん顔を上げて！　おいしいパスタを食べましょうね？」

私は少し、川島さんの“急用”の詳細が気になったが、あえて聞かなかつた。それよりも、今日は聞きたいことがたくさんある。今日も仕事の合間に時間を作って来たから、あまり長居できる時間はない。とにかく、川島さんをはやくなだめて、社長さんの情報をたくさん入手しなければ！

そう思った私は、川島さんの罪悪感を和らげる内容の話をした。

「そうだ！ 聞いてください。実は川島さんが、急用で来られなくなったおかげで、私に新しい友達ができたんですよ。“カエデ”さんという、アイドルを目指している女の子なんですけど……」

「え！？ カエデ！！」

私の“カエデ”という言葉に、先ほどまで頭を下げていた川島さんが急に反応した。私はあまりに急な川島さんの反応に驚き、啞然とした。

「ハルカさん！ その“カエデ”っていう子の住所しらない！？
実はいろいろと事情があつて、その子を探しているんだよ！」

今から3日前、田中敬一から「“カエデ”という少女を探して欲しい」と頼まれた。田中敬一にはいろいろと迷惑をかけたし、力になつてやりたいと思ひ、俺は自分なりに“カエデ”という少女を捜索していた。しかし、中々見つけないことができて困っていたのだが、まさかハルカちゃんから“カエデ”という少女の名前が出てくるとは……世間は意外と狭いものだ。

「あ、えつと……私も知らないんです……………」

「何でもいいんだ。別に住所じゃなくても、カエデちゃんの行きそうな場所とか知らないかな？」

ハルカちゃんはかなり困つたような表情で「うーん」と言っていた。ハルカちゃんの困り顔、それは俺が初めて見るハルカちゃんの表情で、とてもかわいらしかった。他にも、俺の知らないハルカちゃんの表情や仕草があるのなら、その全てを見たい。俺はこのとき、そう思わずにはいらなかった。

「……………あ！ そうだ、事務所に行けばカエデさんの住所、わかるかもしれません。カエデさんも、私と一緒にアイドル『カシユーナツ』のオーディション受けていたんです。だから、エントリーシートが残っているかもしれません」

「ほんとに!?!」

「はい、ちょっと待ってください。マネージャーさんに聞いてみま
すね」

そう言つと、ハルカちゃんは携帯電話を取り出して席を立った。
食事席から遠ざかるハルカちゃんの後姿は、とてもキレイだった。
このとき、俺はいつも、夢や恋を追いかけるハルカちゃんの後姿
ばかり見ているなあ、と思つた。

ハルカちゃんの後ろ姿は素敵だけど、俺はやっぱり、正面からハ
ルカちゃんを見たい。

俺はこの時、改めてそう思つた。

『……あ！ ハルカさん、ありがとうございましたよ。えーっと、“栗山カエデ”さんのエントリーシートでいいんですよね？』

電話越しに聞こえる未実さんの声は相変わらず覇気がなく、しなびた葉野菜のようだった。

「川島さん、カエデさんのエントリーシートあったみたいですよ。今マネージャーさんが確認してくれています」

「ほんとですか！？ ありがとうございます」

川島さんはとても喜んでいて。正直、私はいつも川島さんに対して罪悪感を持っていた。

“私は川島さんを利用している”

私はちゃんとそれを理解している。理解した上で、川島さんに期待を持たせて、川島さんの心をもてあそんでいる、最低な女。それでも、いい。最低な女になろうとも、それでも私は社長さんのことをあきらめたくない。だから、川島さんには悪いけど、利用させてもらう。

……でも、私はまだまだおこちゃまで、完全な“悪女”にはなれなくて、いつも罪悪感と一緒に生きている。だから、その罪悪感を少しでも減らしたくて、私は川島さんの手助けをしたと思った。川島さんの手助けをして、罪悪感から少しでも開放されたい。許し

てもらいたい……。

私はそんな汚い感情を心に持ちながら、未実さんに話しかけた。

「未実さん、カエデさんの住所を教えてくださいなのですが」

「……すいませんが、それはできません」

「え！？ どうしてですか？」

『個人情報ですから……いくらハルカさんといえども、それはちょっと……』

「そこを何とかお願いできませんか？」

『うーん……もしバレたら大変なことになりますし……やっぱりできません……』

「そうですかぁ……」

電話越しでも、とても申し訳なささそうな雰囲気存分に伝わってきた。未実さんは変にまじめだから、仕方ないかぁ。これ以上未実さんに迷惑かけるのも心苦しいし……。

私の心に今度は未実さんに対する罪悪感が渦巻き始めた。

「川島さんすいません。エントリーシートはあつたんですけど、住所は個人情報なので教えられないそうです……すいません、力になれなくて……」

私は川島さんに向かって頭を下げた。川島さんの力になれなかったことは残念だし、罪悪感も多分に残ったままだけど、しょうがない。ここは気持ちを切り替えて、社長さんの話をしよう。また何の見返りもなしに川島さんを利用することになるけど、罪悪感は雪達磨式に増える一方だけれど、私の想いはそれ以上に強い。時間もないし、はやく社長さんの情報を川島さんから聞き出そう。

私はそんなふうに関持ちを切り替えようとした。しかし、川島さんの次の言葉で、私の気持ちは大きく変化してしまい、うまく切り替えることができなかった。

「じ、実は……そのカエデっていう少女を探しているのは、僕じゃなくて……社長なんだよ」

77. ふけさん

『カエデちゃんの住所わかったぞ。 ×町3丁目にある一軒家にすんでいるそうだ。そこにカエデちゃんがいるかどうかかわらんが、行ってみるといい』

私は川島くんからのこのメールを見て直ぐに、家を飛び出した。そして、タクシーをつかまえて、急いでカエデさんの家に向かった。

カエデさんには、言ってやりたいことが山ほどある。

“ 何で私に断りなく、いなくなっただんだ！ ”

“ 何で連絡の一つもよこさないんだ！ ”

“ 心配したんだぞ！ ”

“ 君は一人でアイドルをやっているんじゃないぞ！ ”

“ いろんな人の力を借りていることを忘れるな！ ”

次々と浮かんでくる言葉。この言葉達を、怒りにも似たこの感情に乗せてぶちまけてやろう！

私がそんなことを考えているうちに、タクシーはカエデさんの家の前に到着した。

「ピンポン！」

「……………」

タクシーから降りて直ぐ、カエデさんの家のチャイムを鳴らしてみたが、反応はない。留守なのだろうか？

「ピンポン！ ピンポンピンポン！」

「カエデさん！ いるなら返事して！」

何回もチャイムを鳴らしたが、相変わらず反応はない。やはり、今は誰もいないのだろうか？

私はそんなことを思いながら、試しにドアノブを回してみた。すると、すんなりと回った。どうやら鍵は開いているらしい……。

「おじやまします……………」

私は忍び足で家の中へと潜入した。これはいわゆる“不法侵入”というやつだが、仕方がない。カエデさんのアイドルデビューの夢を叶えるために、“法”には少し目を瞑ってもらおう。

家の中はいたって普通だった。どこにでもある中流階級の家を想像してもらえれば、大体あっているだろう。

「カエデさん？ どこにいるの？」

私はとりあえず2階から探そうと思い、階段を上った。

「……………」

階段を上って直ぐの部屋の扉に『カエデ』という表札がぶら下がっているのが見えた。

【ふけさん……ごめん】

さらに、扉の向こうから、ボソボソとしたしゃべり声も聞こえた。その瞬間、私はカエデさんがこの部屋にいることを確信し、それと同時に感情が昂ぶった。

「カエデさん！ 何でいなくなったの！！」

私は昂ぶった感情に任せて、カエデさんがいるであろう部屋のドアを勢いよく開けた。

私は自分の部屋に7日間ずっと引きこもっていた。そして、アイドル『クリスタル』の『ミミ』さんについて、いろいろと考えていた。

私がアイドルに興味を持つきっかけとなったのは、占いアイドル『クリスタル』の『ミミ』さんだった。テレビの向こうに住む、美しい女性に、当時7歳の私は純粋に憧れた。

“憧れ”のエネルギーはすさまじいもので、小学生の私はお小遣いを必死にためてCDやアイドル雑誌を買いあさった。ミミさんが出演したテレビ番組を全て録画した。毎日ミミさんのことを妄想した。毎日ミミさんにファンレターを送った。その枚数は日に日に多くなり、最終的には100枚にわたる濃密なファンレターを送った。ミミさんと同じ服が着たくて自分で作った。そして、その継ぎはぎだらけの服を着て学校に通った。

これは、ただ純粋にミミさんのことをもっと知りたいと思っただけの行動だが、周りから見れば少しおかしな子だったかもしれない。今振り返るとそう思う。

そんな、私の憧れであるミミさんが、とあるインタビューでこんなことを言っていた。

【私はアイドルとしてほんとうに未熟者です。私一人ではここまで来ることはできませんでした。私のことを見つけてくれたみなさん

に、とても感謝しています】

幼い私はこの言葉を聞いて『本当のアイドルは、何もなくても誰かが見つけてくれるものなんだ!』と思った。このとき、ミミさんの【私のことを見つけてくれたみなさん】という言葉が、幼い私の心に深く突き刺さったのだ。

その日以来、私は心の底から純粹に、自分もアイドルになれると思った。盲目的に、たいした根拠もないのに、幼い私はアイドルになれると信じて疑わなかった。

しかし、現実には厳しいもので、何もしないで日々を過ごしていたところでアイドルになれるはずもなかった。だから私は高校入学の期にアイドルオーディションを受けるようになった。誰も私のことを見つけてくれないのは、私が少し見えにくい所にいるからだと思いい、「しょうがないから、私のほうからオーディションに出向いてあげるわ」という気持ちで最初はオーディションに参加した。

私を見た瞬間、「おお！ 君は金の卵だ！ 今すぐアイドルとしてデビューしなさい！」と言われるだろうと思いつながら受けた、最初のオーディション。結果は惨敗だった。

歌唱審査、ダンス審査、自己表現。全てにおいて他の子のレベルが高くて、私は群を抜いてへたくそだった。そのあまりのへたくそさに、私の審査のときに他の参加者が笑っていた。終いには、審査員の人まで、私のへたくそなダンスを見て笑っていた。私は自分があまりにも場違いな存在であることを肌で感じ、恥ずかしい気持ちでいっぱいだった。すごく、惨めだった……。

この初オーディションでの失敗以来、私は必至でダンスや歌の練

習をした。毎日毎日必死で努力した。私は自分の魅力が足りないからオーディションに落選したのだと思い、その魅力を磨くために努力をした。

でも、本当は違った。私の努力は自分を磨くためのものじゃなくて、アイドルとしての素質が1%もないちっぽけな自分を、隠すための努力だったんだ。

『アイドルになったことがない人に、アイドルの苦労はわかりません。そして、その苦労を知ろうともしないで、三流だ四流だと言っているあなたに、アイドルを語る資格はありません!』

あの日、イタリアン『天使のお零れ』でミミさんが私に言った言葉は、私が必死に身にまとってきた努力を簡単に剥がした。そして、何もまとうことのない、ちっぽけな私という存在と無理やり向き合わされた。その、ちっぽけな私は、あまりにも普通で、全然輝いていなくて、どうしようもないくらい地味で……見たくなかった。何にも持っていない自分”と向き合うのは、すごく怖かった。体中が震えた。だから、あのと私……逃げることしかできなかった。

「ふけさん……ごめん」

何故か、ふけさんに対する謝罪の言葉が口から出てきた。

“ふけさん、ごめん”

私があらためて心の中でそう思った瞬間、急にドアが勢いよく開いた。

「カエデさん！ 何でいなくなったの！！」

開けた扉の向こう側には、怒った表情のふけさんがいた。

79・ふけさん

「カエデさん！ 何でいなくなったの！！ さすがの私も怒る……
よ……………」

私は勢いよくカエデさんの部屋に入った。怒鳴ってやるつもりだった。でも、ベッドの上で、小さく体育座りをしているカエデさんを見た瞬間、怒りはどこかへ消えてしまった。

「ふけ……さん？」

そこにいたのは、まだ幼い、少女だった。

私はいつの間にか、カエデさんは強くて立派な女性だと思っようになっっていた。でも、それは違った。カエデさんはまだ、か弱い少女のままだった。

ここ最近、いろんなことが少女の身に降りかかった。少女はオーディションに落ちてふてくされ、私にファーストキッスを奪われ激怒し、アイドルとしてデビューできることに胸躍らせ、今まで挑戦したことのない作詞に悩み、生臭い豆腐を食べることに我慢をした。

そんな、あまりに急激な変化に耐えられず、どうしようもなくなっつて、ただ途方に暮れるしかない少女。

「カエデさん」

そんな少女を見た瞬間、私は何故かカエデさんの名前を呼んだ。

よくわからないけど、“カエデ”という響きが、どうしようもなく愛しくて、声に出さずにはいられなかった。

「カエデさん……」

この言葉を呟いた瞬間、私の心に一つの感情生まれた。ああ、この感情はいつたどこから来たのだろうか？ はがゆくて、暖かくて、激しくて、ドキドキして、甘くて、ぐちゃぐちゃで、それでいて静寂のように穏やかで……。

“愛しい”ではあrawしきれない、なんとも言えない感情が、私の心を支配した。そして、この感情は心だけでなく私の体まで支配した。支配された私の体は、最短の動きで、カエデさんを、やさしく、強く、抱きしめた。

このとき、私は自分の気持ちに気付いてしまった。私は、カエデさんのことが……好きだ。

『じ、実は……そのカエデっていう少女を探しているのは、僕じゃなくて……社長なんだよ』

俺は、何であんなことを言ったのだろう？ 田中敬一の力になりたかったから？ 違う！ 確かに田中敬一の力になってやりたいとは思っていたけど、ハルカちゃんに無理を言っただけで力になってやりたいとは思っていなかった。じゃあ、なんで？ なんでわざわざ“社長”という言葉を使って、ハルカちゃんに「カエデという少女の住所を教えて欲しい」と頼んだんだ？

……わかつている。わかつているんだ、ほんとは。俺はただ、憎かっただけ。目の前にいる俺じゃなくて、どこか遠くにいる社長のことばかり見ているハルカちゃんが、憎くてしょうがなかったんだ。だから、“社長”と“マネージャー”を天秤にかけさせて、ハルカちゃんを困らせて、憂さ晴らししてやろうと思ったんだ。

でも、ハルカちゃんにとって“社長”という言葉は、ただの言葉じゃなかった。

『じ、実は……そのカエデっていう少女を探しているのは、僕じゃなくて……社長なんだよ』

この言葉を聞いてからのハルカちゃんは、ほんと、笑っちゃうくらい別人だった。

“社長さんのためなら”

そう思った瞬間から、ハルカちゃんの行動力・会話力は跳ね上がり、体中からエナジーが溢れていた。そして、ものの数分で、あれほど電話越しに渋っていたマネージャーから、カエデという少女の住所を聞きだした。

そんな恋の力のすさまじさを目の当たりにして……『完全に負けた』、そう思ったよ。

『あ！ もう時間だわ。私次の撮影があるので、そろそろ失礼します』

『……ハルカさん、今日はありがとう。すごく、楽しかった』

『私もです。またランチ、一緒にしましょうね』

『……ハルカさん、これ』

『これは……？』

『社長の……いや、田中敬一の連絡先』

『え？』

『これからは、僕を介する必要はない。直接、田中敬一と連絡を取る方がいいよ』

『えっと……川島さん？』

『そねじや、ちよなひら』

81・カエデ（前書き）

各話のタイトルの人物がその話の主人公となります。話ごとに主人公がかわりますので、少し読みにくいかも知れませんが、ご了承ください。

明日は、『暗黒豆腐少女』のデビューライブだ。だめだ、ドキドキしすぎて、眠れそうもない。

私は心の底からふけさんに感謝したい。ふけさんのおかげで、立ち直ることができた。ミミさんの言葉は、痛かった。辛かった。アイドルになるという夢を、あきらめようと思った。7日間家でひきこもっている間に、私の夢への活力は、完全にゼロになっていた。

でも、ふけさんにやさしく抱きしめられたとき、もう枯渴したと思っていた活力が沸いて来た。私はこの活力がどこから来ているのか、そのときはわからなかった。でも、今ははっきりわかる。この力は、ふけさんの力だ。

今まで私は、一人で『アイドルになる』という夢を掲げ、一人でその夢を背負って歩き、一人で折れそうな心を支えてきた。でも、今は違う。今は、ふけさんがいる。ふけさんと二人三脚で夢を掲げることが出来る。二人で夢を背負うことができる。私が夢の重圧に負けて、支えきれないときは、ふけさんが支えてくれる。それを知っているだけで、私は強くなれた。

結局、夢と本気で向き合う瞬間ってというのは、人は一人だ。一人の力のみで夢に挑み、一人の力のみを評価され、一人の力のみで夢と向き合う恐怖と戦わなければいけない。でも、そんなとき、誰かの支えがあつたら人はものすごい力を発揮できる。心を支えてくれる他の誰かがいるだけで、一人の力は何倍にも膨れ上がるんだ。

ふけさんはそれを言葉ではなく、抱きしめることで教えてくれた。もう、大丈夫。私は絶対にブレない。アイドルになる。もう、立ち止まらない。

デビューライブ前夜、私がこんな感じで自分自身を鼓舞していると、ふけさんからメールが届いた。

『カエデさん、明日のデビューライブがんばってください。それと、ごめんなさい。実は、明日のデビューライブに私はいけません。ほんとはもっとはやく言うべきだったのだけれど、今日まで言えませんでした。ごめんなさい。とにかく、私は明日、君の傍にいてやれないけれど、私の心は君の傍に置いていくつもりです。だから、明日のデビューライブ、思う存分暴れてください。健闘を祈ります』

正直、ふけさんが明日のデビューライブに来られないこと、ショックだった。でも、ふけさんは『私の心は君の傍に置いていく』という言葉をくれた。私にとって、それだけで十分だ。その言葉だけあれば、あとは自分の力でステージに立てる。だから、ふけさん安心して。私、大暴れしてくるから！

私はそんなことを考えながら、ふけさんに返信のメールを送った。

82・ふけさん

明日は、『暗黒豆腐少女』のデビューライブだ。そして、ハルカとかいう女とデートしなければいけない日だ。

ああ、私はまた、カエデさんがアイドルとして成長する“瞬間”を見逃してしまうのか……。

そう思うと、悔しくて、歯がゆくて、心が揺れた。やっぱり明日のデートは断ろうか……。そう何度も思ったが、川島君の男泣きを思い出すと、どうしても断りのメールを送ることはできなかった。

私がそんなことを考えていると、メールが届いた。

『こんにちは。突然のメールごめんなさい。私、ハルカと言う者です。川島さんからメールアドレスを教えてくださいました。この度は、無理を言つてしまい、申し訳ありません。社長さんがお忙しいことは重々承知しております。でも、私、どうしても社長さんに会つてお礼を言いたかったです。明日、私はとても楽しみにしております。社長さんも、楽しんでくれたら嬉しいです。おやすみなさい』

ハルカ……か。少し“カエデ”と音が似ているなあ。でも、全然違う。“ハルカ”と何度呟いても、心に響くものは何もない。でも、“カエデ”という響きには、愛しさが含まれていて、呟くたびに私の心はふわふわしてしまう。

ああ、私はやはり、少しでもカエデさんの傍にいたい。これはわ

がままだろうか？

“ 川島君との約束 ”

“ 何故か私とのデートを楽しみにしているアイドルの心 ”

この二つを破るような行為をしてまで、私のわがままは存在していいのだろうか？

『 カエデさんの傍にいたい 』 という気持ちとの葛藤。 その葛藤が導き出した答えは、私のメールに込められた。

『 私も、ハルカ君と会えることを楽しみにしています。 ちなみに、明日のデートのことですが、商店街でお祭りがあるのですが、そこに行くというのはどうでしょうか？ 』

明日、商店街のお祭りで『 暗黒豆腐少女 』 のデビューライブが行われる。商店街でデートをすれば、カエデさんの傍に近づける。それでいて、川島君との約束も果たせる。

ああ、私はなんとズルイ男なのだろうか……。今夜は自己嫌悪で、眠れそうもない……

83・ハルカ

明日は、社長さんとの待ちに待ったデートの日だ。楽しみ。ウキウキすぎて、眠れそうもない。

明日、何かが変わる。それは“関係性”なのか、それとも私の“心”か、はたまた私の“未来”かもしれない。とにかく、他の人にとって取るに足らない一日かもしれない。でも、私にとって明日のデートは、天地がひっくり返るような、劇的な、ターニングポイントなの！ 理屈とかそんな陳腐なものじゃなくて、直感的に、確信できる。

私がそんなことを考えていると、社長さんから返信のメールが届いた。

『私も、ハルカ君と会えることを楽しみにしています。ちなみに、明日のデートのことですが、商店街でお祭りがあるのですが、そこに行くというのはどうでしょうか？』

“ハルカ君”だなんて……うれしくて死にそう！ それに“楽しみにしています”だって。社長さんも楽しみにしてくれたなんて……ああ、胸のトキメキが止まらない！！ 心臓の拍動がどんどん激しくなっていく。もう、これは病といえるくらい、胸が苦しい！

私は痛む胸を押さえながら、ウキウキ気分で社長さんに返信のメールを送った。

『商店街のお祭り、ステキです！ 楽しみです！！ 楽しみすぎて

胸のドキドキが止まりません!!!」

メールを送って十秒後、改めて送った文章を見て、私は後悔した。ウキウキ感情が文章に表れすぎている。社長さんに変な子だと思われなければいいのだけれど……。

そう思うと、気持ちが悪くなり、私は少し冷静になった。そして冷えた頭で明日のデートについてももう一度深く考えた。準備は大丈夫だろうか？ 財布はカバンにいれた？ ハンカチーフは？ 着ていくものは？ …… 商店街でお祭りということは、浴衣を着ていったほうがいいのかしら？

私はあまりにも気持ちが不安定で、どうしたらいいのかわからず、誰かに相談したいと思った。このとき、一番に思い浮かんだのは…
…川島さんだった。

「川島さん、まだ起きてるかしら？」

私はそんな小言を呟きながら、川島さんにメールを送った。

84 警察官川島

明日は、ハルカちゃんと田中敬一がデートする日だ。……だからなんだって言うんだ。俺には関係のないことだ。

俺はそう思いながらも、何故かソワソワして、寝付けずにいた。そんな夜中、一通のメールが届いた。

『川島さん、こんばんは。夜分遅くにすいません。実は、明日社長さんと商店街のお祭りに行くことになったのですが、浴衣を着て行った方がいいと思いますか？ それはハリキリすぎでしょうか？ いつもどおりの私服の方がいいのでしょうか？ こんなこと、相談できるの、川島さんしかいなくて……ごめんなさい』

……はあ？ なんだよこのメール！！！！
今何時だと思っただよ！！ もう、俺にメールする必要なんてないのに、なんでこんなくだらない内容のメールをよこすんだよ！！
！ 浴衣？ 私服？ どーでもいいだろ！！ そんなこと！ 『……
…ごめんなさい』ってどういうことだよ！！ なんて謝るんだよ！！
！！ 謝るくらいならメールするんじゃねーよ！！ ちくしょう
！ ちくしょうちくしょうちくしょう！！ ………………ちくしょう
よう。こんなにイラついているのに、こんなに憎いのに、なんでまだ、好きなんだよ。なんで、嫌いになれないんだよ！ こんちくし
よう……

85・アイドル研究家

明日は、ご当地アイドル『暗黒豆腐少女』のデビューライブか

いったいどんなアイドルだろうか？ やはり、既存のアイドルについてグダグダと語るより、新しいアイドルを発掘する方がおもしろい。金にはならないが、『新人アイドルを発掘する』というライフワークだけはやめられない。

私にとってアイドルとは“人の心を掴む者”であり、細かい特徴や能力差はあろうとも、結局“心を掴まれるかどうか”ということが、アイドルの良し悪しを判断する規準となる。

さて、『暗黒豆腐少女』は私の心を掴んでくれるだろうか？ 楽しみだ。

私はそんなことを考えながら、徹夜でコラムの記事を書き上げた。

86・ふけさん

本日は晴天で、季節は夏。

暑さと蝉の声が入り混じり、夕刻の空に波打つ。

赤と黒が入り混じる空には、もう星が輝いている。

そんな星が見下ろすのは、眼下にうねる人の川。

今日は祭り。

歡喜の集い。

そんな祭りの熱気は空へとのぼり、恐ろしい入道雲が世界に広がる。

そんな世界は今日も平和で、今日も残酷だ。

そして銀河は、今日も綺麗に澄んでいる。

そんな銀河以上に、彼女の瞳は澄んでいて、私は思わず瞳の奥のブラックホールに引き込まれた。出会って数分で、私は心を掴まれそうになった。

あぶないあぶない……。さすが一流アイドル、これは惚れてしま
う川島君の気持ちかわからんでもない。私も、カエデさんより先に
出会っていたら、心を奪われていたかもしれない。

そう思えるような、素敵なアイドル。それが、私がハルカ君に出
会って最初に抱いた感情だった。

87・ハルカ

まるで熱帯夜にこびりつく蝉の声のように、心音が耳に鳴り響く。

ドキドキが体中に波打ち、足が震える。

そんな、立っているだけでせいぱいの足で、私はあなたを待っていた。

今日は祭り。

にぎわいの人波。

そこら中に笑顔があふれていて、そこら中でドラマが生まれていた。

そして、愛やら喜びやらが、まるで温泉の様に垂れ流しにされている。

私は、愛とか喜びとか、そういったドラマチックな要素を多分に含んだものは、もっと希少価値の高いものだと思っていたけれど、どうやらそこら中に転がっているものらしい。

だって今日、それが私の手にも入るのだから。

こんなに身近に私自身がそれを感じているのだから、間違いない。

私がそんなことを考えていると、社長さんがノコノコとやってき

た。

「やあ、ハルカ君。遅れてすまないね」

社長さんの声を聞いて、顔を見て、何度も何度も思い描いた”存在”を直に感じて、私の体中の血液が沸騰した。

ボカーン！ ブクブク！ ドガン！ 見たいな感じ。

なんていうか、そんな抽象的で幼稚な表現が最もふさわしいような感情。それが私の体を行ったり来たり。ああ、顔が熱い。ほてりが冷めない。心臓もさらにギアを上げた。

私は今日一日、このまま意識を保ち続けられるかしら？ そう、不安に思ってしまうほど、私の心と体は“恋”という暴れん坊に荒らされていた。

88・警察官川島

祭りの夕闇。

行きかう人々は、内なる熱気を好き勝手に空へと放散している。

それはもう、地球温暖化などおかまいなしというほどに。

そんな中、俺一人だけが内なる熱気を放散することができず、悶々とした熱を、ただこの身に溜めることしかできなかった。

結局、俺はハルカちゃんと田中敬一のデートが気になり、商店街の祭りに来てしまった。はあ……、情けない。俺はこんなちっぽけな体一つ、コントロールできないなんて。

俺はそんなことを考えながら、まるで野獣のように青春を熱気に変えて、その熱エネルギーでうごめく群衆の中を歩いていた。

商店街の小さな祭りとはいえ、この狭い空間に千を超える人々が集まっている。これほどの人の中から、ハルカちゃんを見つけることができるだろうか？ 別に見つけたところで何があるわけでもない。むしろ、見つけないほうが俺にとって良いことなのだろう……

俺はそんなくだらないことを考えながら人波を漂っていたが、数秒後、その考えは杞憂に終わった。

「あ……」

人波を外れて一人、木の下でたたずむ浴衣姿の美しい女性。俺は一目でそれがハルカちゃんだと認識し、その瞬間周りの景色は消え落ちた。そして、ハルカちゃんだけが俺の瞳に残った。

89・カエデ

夜の空。

星達が自己主張合戦を繰り広げる。

どの星も、かなしいくらい輝いていて、うらやましかった。

今日は祭り。

熱気の集い。

そんな熱気の正体は、夢か青春かはたまた幻か。

唯一つ自信を持って言えるのは、今この瞬間、最も激しく熱気を放っているのは、この私。

無尽蔵に吐き出される私の熱気は、人の心に火をつける。

そして、心の燃えた人々は、まるで蒸気機関車のようにさらなる熱気を発散する。

発散された熱気は、一人では寂しいらしく、寄り添い、かたまり、まるで孤独な人々のようにモクモクと世界に広がる。

そして、地球という大きな箱に充満した熱気は大気圏を突破し、宇宙の果てへと到達する。

その瞬間、私は宇宙と一つになる。

当然、宇宙と一体化した私に怖いものなどあるはずもなく、あるのは満ち溢れる自信と熱気、そして少しのドキドキだけ。

さあ、行こう！

あのステージの向こうに。

私はそんなことを考えながら、ステージに続く階段を駆け上がったのだけれど、このとき、左手で強く握り締めたマイクだけが小刻みに震えていたことに、私自身気付いていなかった。

90・アイドル研究家

アイドルとは、それ即ち“エネルギーの塊”である。

あの小さくて華奢な肉体に、いったいどれほどのエネルギーが溜め込まれているのか、皆目見当がつかない。

おそらく、ビッグバンよりも強大なのだろう。

アイドルの輝きよりも、こんなちっぽけな宇宙を生み出すことしかできなかったエネルギーの方が、強いはずがない。

そんなの生まれたばかりの赤ん坊でもわかることだ。

頭の固い大人には、一生かかってもわからないだろうがな。

これがどんなに難しい数式を見つけることよりも価値があるということに、目の腐った人間は何故か気付けない。

いや、気付いているのだろうけれど、それを認めたくないのだろう。

彼女達が笑えば、それ即ち幸せであり、世界はそれだけで平和なのに、そんな単純なことに価値はないと決め付けているのだ。

何？ ”笑顔” だけじゃ平和になれない？ お金がなければ誰も救えないって？

そんなのはただの後付さ。

だって、彼女達はお金を持っていないけれど、その身に秘めたエネルギーのみで、人々を動かせる。そして、彼女達に動かされた人々が、世界に平和をもたらししているのだから。

きっとこの世にお金が存在しなくても、彼女達は歌い、踊り狂い、エネルギーを流し続けるだろう。そして、そのエネルギーを受け取った人々は、お金がなくても世界を平和にするだろう。

人の本質は、エネルギーなのだよ。

お金が一番わかりやすい手段でしかない。

それを、アイドルは私に教えてくれた。

だから私は、アイドルのエネルギーを少しでも多くの人に伝えたい。

私はアイドルから貰ったこのエネルギーを使って、世界平和を実現したいんだ。

そして世界平和を実現するために大切なのは、お金を集めることじやなくて、人を動かすこと。

世界平和にお金が必要ならば、自分がお金を集めるんじゃない、裕福な人に払わせればいい。

合理的でしょ？

そして、それを実現するのは人のエネルギーであり、その最たるも

のが、アイドルなのだよ。

そんなエネルギーを持ったアイドルがたくさんいれば、それだけ世界は平和に近づく。

だから私は今日も新たなアイドルを求めろ。

『暗黒豆腐少女』デビューライブ。

今日もまた、世界を平和にするアイドルが一人、産声を上げる。

91・ふけさん

肩と肩の距離、おおよそ10センチ。なんともぎこちない距離だ。初対面の二人としては近すぎる。だが、このたくさんの人波を二人別れないよう歩くには、この距離を保つしかない。我慢しよう。

私はそんなことを考えながら、きつと他の誰かがそこにいられることを悲しいほど望んでいるであろう、ハルカ君の左隣を陣取り、祭りの人波を闊歩した。

「……………」

ハルカ君と出会ってから、もうすでに10分くらいたっただろうか？ おたがい、ずっと沈黙したままだ。ああ、何とも居心地の悪い空間なこと。息が詰まりそうだよ。ハルカ君がいるいると話をしてくれるもんだと思っていたから、何も話題を用意していない。確か川島君の話では、相当私とのデートを楽しみにしていたはずなのに、なんでさつきから下を向いて黙っているんだ。はたから見たらすぐくつまらなそうだよ、ハルカ君。君はそれでもアイドルかい？ アイドルならもつとうまく表現をしてくれないと、伝わらないよ。誰の心も動かせないよ。さあ、私と最初に会ったときのような飛び切りの笑顔で楽しいおしゃべりをしておくれよ。私は愛しいカエデさんのデビューライブを我慢して、君に付き合っているんだよ。君は、気まずい雰囲気を私にプレゼントするために、私の貴重な“瞬間”を奪ったわけではないのだろう？

カエデさんのデビューライブが近づくとともに、私のハルカ君に

対するイライラが少しずつ増えてきていた。そんな時、

「ピロピロピロン　ピロピロピロン」

ハルカ君の携帯が鳴った。

「あ、す、すみません……」

ハルカ君は申し訳なさそうに、アタフタとした動きでカバンから携帯電話を取り出して、画面を確認した。その瞬間、

『本日のメインイベント、『暗黒豆腐少女』のライブが10分後に始まります。みなさん、中央広場特設会場へ、ぜひいらしてください！』

というアナウンスが流れた。そのアナウンスを聞いた人の川は、物珍しさに釣られたのか、中央広場へ向かって動き出した。私はいてもたってもいらなくなり、その川に乗ってカエデさんのもとへと向かおうとした。そのとき、

「もげえ！」

何者かに服の襟元をものすごい力で引っ張られ、中央広場へと向かう人の川から引き離された。

「ぐ、ぐるざい」

私は襟を引っ張られ首が苦しかったので、直ぐに後ろを振り向いて、襟を引っ張る手を振り解いた。

「ちょっと！ いきなりなにすんの！？ 苦しいじゃないか！」

私がそう、怒鳴りながら振り向くと、そこにはハルカ君がいた。どうやら、私の襟を引っ張っていたのはハルカ君だったらしい。華奢なのに、すごい力だ。

「ごめんなさい……」

ハルカ君の目には、涙が溢れていた。ハルカ君は何度も何度も頭を下げて謝った。そのたびに、大粒の涙がぼったんぼったんと落ちていた。

「いや、その……わかればいいのだよ……わかれば……」

私はハルカ君の涙に動揺してしまい、困ってしまった。

「ほ、ほら。今日はせっかくの祭りなのだから、楽しもう。祭りに涙は似合わないよ。ほら、顔を上げて」

私はハンカチーフを差し出し、なかば強引にハルカ君のうつむく顔を上げた。その瞬間、ハルカ君と目があつた。

「私、社長さんにずっと会いたかつたんです！ 私がアイドルになれたのは社長さんのおかげなんです！！ 社長の好きなものは何ですか！！ 今日私の浴衣姿どうですか？ 似合っていますか！？ アイドルに大切なものは何ですか？ 私今すごくドキドキしています！ こんどライブに来てください！！ もっと社長さんのこと知りたいです！！ 今お付き合いしている人はいるのですか！？ 私みたいなお子様は嫌いですか！？」

そして、ハルカ君は間をあげずにものすごい勢いでしゃべりだした。その言葉達は、まるで壮大で純粋な流星群の様に、祭りの闇夜を流れた。

「何をやっているんだ！ バカタレ！！」

念願の社長さんを前にして、ただうつむくことしか出来ないハルカちゃんを少し離れた所から見て、俺は思わずそんな暴言を呟いた。

ハルカちゃん、今こそ勇気を出すときだろ！？ 今君の目の前には、幻想じゃない社長さんがいるんだよ。世の中にはどんなに望んでも、幻想にしか恋できない人だっているんだよ。臆病で、悲しいほど人を想い過ぎで、好きな人に会うために、好きな人の所へ向かう一歩すら踏み出せない、そんな人間だっているんだよ。

でも、君は違うだろ？ 君は臆病者じゃない。ちゃんと「社長さんに会いたい！」と表現できていたじゃないか。ちゃんと行動したじゃないか。幻想だけじゃなくて、現実と向き合おうとしたじゃないか！ 君は素敵だよ。自信を持って。さあ、表現するんだ。へたくそでもいい。大切なのは、表現しようとする姿勢であり、表現せずにはいられないほど強大な心のままに生きるということだよ。

「ハルカちゃん、がんばれ！」

俺はそんな小言を呟きながら、気がつくともメールを打っていた。

「ハルカさん、大丈夫。きつと、うまくいく」

たった二行のメール。それだけで十分だと思った。今ハルカちゃん

んに必要なのは“きつかけ”であり、変に悟ったような俺のクソみたいな言葉は必要ない。

俺がそんなことを考えていると、祭りの空にアナウンスが流れた。

『本日のメインイベント、『暗黒少女』のライブが10分後に始まります。みなさん、中央広場特設会場へ、ぜひいらしてください！』

……ほら、やっぱりそうだ。ハルカちゃんは、強い子だ。

俺のメールがきつかけだったのか、それともアナウンスがきつかけだったのかわからないけれど、まるで崩壊したダムのようにしゃべりだしたハルカちゃんを見て、俺は安心した。それと同時に、胸が少しグツと掴まれたような感じがして、苦しかった。

「私、社長さんにずっと会いたかったんです！ 私がアイドルになったのは社長さんのおかげなんです！！ 社長の好きなものは何ですか！！ 今日私の浴衣姿どうですか？ 似合っていますか！？」

ああ、ハルカちゃんの表現は何てへたくそなんだろう。あんなに勢い良くしゃべっても、何言っているんだか全然わからないよ。君はきつと、君の心にある感情を表現する術を知らないだろう。それでも、どうにかして表現しようとする、そのすごく一生懸命な姿は、きつと誰かの心を打つだろう。そんな君に比べて、俺は……俺は……臆病者だ。

俺は、ちゃんと表現しなかった。俺はきつと、この心の中にある感情の表現方法を知っている。若いハルカちゃんよりも、もっと巧みにこの感情を人に伝えることが出来る。それなのに……俺は表現

しなかった。何度も何度も何度も、チャンスがあったのにしなかった。俺は……俺は……。

こみ上げてくるのは、臆病な自分に対する、失望感だけだった。

93・ハルカ

声が出なかった。

笑顔が作れなかった。

何も出来なくて、うつむくことしか出来なかった。

そんな自分の行動に、私が一番驚いた。

好きな人の存在というのは、こんなにも自由を奪う。それを、初めて知った。“恋の奴隷”という言葉の意味が、少し理解できた気がした。今私は体のみならず、声までも、自由にコントロールすることができない。体は鉛の様に重く動かない。そのくせ、気持ちだけは溢れてきて、私の心は破裂寸前。声すら発することが出来ない私に、この心に溢れる気持ちを発散する手段はないというのに……。

うう、……苦しい。心が破裂しそうで、痛い。でも、体が、喉が、動かない……。

表現できない心の葛藤ほど、辛いものはない。世界で一番の辛さが、心にある。それなのに、そのことに誰も気付いてくれない。は

たから見てもただうつむいているだけなのだから、しょうがないのだけれど。表現をしない自分が悪いのだけれど。気付いて欲しいというSOSすら送れない自分のせいなのだけれど、

“誰か、気付いて！”

私はそう、切に願わずにはいらなかった。

「ピロピロピロン　　ピロピロピロン」

急に携帯が鳴ったので、驚いた。それと同時に、ようやく“黙ってうつむく”以外の行為ができると思い、ホッとした。

「あ、す、すいません……」

私は小さく呟くと、直ぐにメールを確認した。メールの差出人は、川島さんだった。

『ハルカさん、大丈夫。きつと、うまくいく』

このメールを見た瞬間、体が急に軽くなった。エネルギーが体中から湧き上がった。そんな折、アナウンスが流れた。

『本日のメインイベント、『暗黒豆腐少女』のライブが10分後に始まります。みなさん、中央広場特設会場へ、ぜひいらしてください！』

このアナウンスを聞いた瞬間、社長さんが私から離れようとした。私は自由になった体を使って、必死に社長さんの襟を掴んだ。引っぱ張った。さらに自由になった私の体は、溜まりに溜まった感情を発

散せずにはいられなかった。ある感情は涙で、ある感情は頭を下げることで、ある感情は体を震わせることで表現した。それでも足りなくて、まだ心にたんまりと残っていた感情は、自由になった声に全て詰め込んで、表現した。

「私、社長さんにずっと会いたかったんです！ 私がアイドルになれたのは社長さんのおかげなんです！ 社長の好きなものは何ですか！！ 今日私の浴衣姿どうですか？ 似合っていますか！？ アイドルに大切なものは何ですか？ 私今すごくドキドキしています！ こんどライブに来てください！！ もっと社長さんのこと知りたいです！！ 今お付き合いしている人はいるのですか！？ 私みたいなお子様は嫌いですか！？」

私は自分の想いを表現するだけで、せいっぱいだった。伝わらなくてもいい。ただ、感じて欲しい。そんな気持ちで体をめいっぱい震わした。声を、想いを、誰の耳に届くともわからない闇夜に、一生懸命放った。

94・カエデ

『本日のメインイベント、『暗黒豆腐少女』のライブが10分後に始まります。みなさん、中央広場特設会場へ、ぜひいらしてください！』

アナウンスが流れた。どれくらいの人に来てくれるのだろうか？ 今いる舞台裏からでは確認できない。まあ、そんなことはどうでもいいわ。たとえお客さんが一人でも、大丈夫。私が歌えば、みんな集まって来る。それはもう、電灯に群がる虫の様にワラワラと。私の熱気が祭りの熱気ごときに負けるはずがない！ 残り10分……もう一度気合を入れなおそうかしら。

私がそう思った時、声をかけられた。

「カエデちゃん！！ デビューライブがんばってなあ〜！！」

声の主は豆腐屋『白角』の店長さんだった。

「あ、店長さん。どうしたんですか？」

「応援に来たんだよお！！ 今日のライブ、楽しみにしてるでねえ」

「……………ありがとうございます」

私の心の支えは、ふけさんだけじゃなかった。店長さんもまた、私を支えてくれた。それを知れただけで、私の両足はどんな重圧にも耐えて、立派に私の体を支えることができる。けして、私の体重が重いという話では、ないのですよ。

「今日はカエデちゃんの記念すべき日だからね。プレゼントを用意したよ。奮発したからねえ〜」

「プレゼント？」

……嫌な予感がした。

「ほれ！ 改良に改良を重ねた、特性『暗黒豆腐』だよ！！ ライブの前にお食べ！！ 元気になれるよ！！」

嫌な予感的中した。……どうしよう。正直、大切なライブの前に『暗黒豆腐』を食べてお腹を壊したら嫌だし。でも、あくまでも私は『暗黒豆腐』のPRのためにライブを行うわけで、ここで拒否するのも気が引けるなあ……。

「ほれほれ！ 大丈夫だつてえ。今度こそ自信作だから！ 一番にカエデちゃんに食べてもらいたくて、味見はしてないんだけどね」

味見をしるおおおおおおおおおおお！！！！

私はそう叫びたかったが、一度店長さんを殴って反省しているの
で、我慢した。

「はぁ………いただきま………しょう！！」

私はやけくそになり、勢い良く『暗黒豆腐』を鷲掴み、そのまま
口に放り投げた。

手の中で飛び散る肉體。口に広がる黒い汁。そして、ほのかに香

る生臭さ。

「まずい!!! やり直し!!!」

「うへえ！ また失敗したか……。ごめんなあカエデちゃん。次こそはとびきりおいしい『暗黒豆腐』を作るからねえ」

もう諦める！ 私はそう思いながらも、ひきつった笑顔で「楽しみにしています」と答えた。

「カエデさん！ もう開演時間です！ ステージへ急いでください！」

気がつくくとデビューライブ開始の時間になっていたらしく、スタッフの人が少し焦った様子で私を呼びに来た。

「あ、はい！ それじゃ、私行きますね。店長さん、いろいろありがとうございました」

私は『暗黒豆腐』を食べさせられた分を差し引いても、店長さんに対する感謝の方が大きかったから、心の底から頭を下げて感謝した。

「おお！ がんばって。”プレゼント”、楽しみにしていてね」

店長さんはそう言うと舞台裏から出て行った。プレゼント？ はて？ さっきの『暗黒豆腐』だけじゃなかったの？

「カエデさん急いで！」

「あ、はい！」

「私は疑問に思ったが、時間がなかったので急いでステージへと向かった。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6779x/>

カシューナッツはお好きでしょうか？

2012年1月14日02時53分発行